Johannes Passion

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン30周年記念

ヨハネ受難曲演奏会

J.S.バッハ ヨハネ受難曲 BWV245

Johann Sebastian Bach Johannes Passion BWV245

《独唱》

福音史家：五郎部 俊朗
イエス：多田羅 迪夫
ピラト、ペテロ：小原 浄二
ソプラノ：井上 しほみ ヘラー
アルト：佐々木 まり子
テノール：鏡 貴之（アリア）
バス：佐々木 直樹（アリア）

《指揮》

ヘルムート・ヴィンシャーマン

《管弦楽》

東京バッハ・カンタータ・アンサンブル

《合唱》

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
（合唱指揮：佐々木正利）

2007. 1/28〈15:00開演〉岩手県民会館大ホール

主催：盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
後援：岩手県教育委員会、盛岡市教育委員会、岩手県文化振興事業団、岩手県合唱連盟、
岩手日独協会、岩手日報社、盛岡タイムス、情報紙游悠、
NHK盛岡放送局、IBC岩手放送、テレビ岩手、めんこいテレビ、岩手朝日テレビ

Prof. Helmut Winschermann
Goddardstraße 28
53125 Bonn
Tel.: 0228-25 74 76, Fax: 369 23 26

Bonn, Januar 2007

Morioka Bach Kantaten Verein:

Zu Ihrem 30jährigen Bestehen gratuliere ich allen Mitgliedern des Chores von ganzem Herzen.
Mit grosser Freude und Dankbarkeit denke ich zurück an:

1991	Kaffee-Kantate
1993	Matthäus-Passion
1998	h-moll-Messe (Paris, Morioka)
1999	h-moll-Messe (Bonn, Kempen)
2000	Weihnachts-Oratorium
	Quodlibet (Goldberg-Variationen)
2003	Matthäus-Passion

Die „Johannes-Passion" werden wir nun am 28. Januar 2007 zu Ihrem denkwürdigen Jubiläum aufführen, und ich bin sicher, mit der beständig gewachsenen Qualität des Chores eine bedeutsame Passion aufführen zu können.

Mit Ihnen zusammen feiern zu dürfen, ist mir mit meiner Frau Midori eine ganz grosse Freude!

Ihr Helmut Winschermann

盛岡バッハ・カンタータ・フェアアインの皆様へ

合唱団設立30周年、団員の皆さん全員に心からお祝い申し上げます。

1991年	バッハ	カンタータ
1993年		マタイ受難曲
1998年		ロ短調ミサ（盛岡）
1999年		ロ短調ミサ（ボン、ケンペン）
2000年		クリスマス・オラトリオ
2003年		マタイ受難曲（盛岡、東京）

大きな喜びと感謝の気持ちで、皆さんと共に演奏した
これらのコンサートを、思い起こしています。
バッハの「四大宗教曲」のうち、まだやり残していた「ヨハネ受難曲」を
本日、2007年1月に30周年記念公演として演奏することになりました。
常にレベルアップしておられる合唱団ですから、
素晴らしい成果を挙げられる事と、確信しています。

記念すべき30周年を皆さんと共に祝うことが出来るのは、
私と、妻ミドリにとって、大きな喜びです。

ヘルムート・ヴィンシャーマン

ごあいさつ

代表　渡　辺　信　之

本日は、盛岡バッハ・カンタータ・フェライン結成３０周年を記念する「ヨハネ受難曲演奏会」にお越しいただき、まことにありがとうございます。当合唱団は、1977年（昭和52年）に「カンタータを歌う会」としてスタート以来、来月末でちょうど満３０年を迎えます。３０年のあゆみがどのようなものであったかは、このプログラム内の年表に掲載し、また当合唱団の指導者であり、指揮者の佐々木先生からいただいた寄稿にも詳しく取り上げていただいております。

今回の演奏会の指揮者として、遠くドイツ・ボン市からお出でいただいたヘルムート・ヴィンシャーマン先生には、既に15年以上の長きにわたって当合唱団とお付き合いいただいております。この前の直筆のメッセージにも書かれている通り、ここ10年だけを取り上げても「ロ短調ミサ」、「クリスマス・オラトリオ」全曲、「マタイ受難曲」を指揮いただき、本日の「ヨハネ受難曲」演奏により、大バッハによる「四大宗教曲」の演奏すべてが完結することになります。まさに、３０周年の節目にふさわしい企画とすることができたことを感謝しています。

声楽ソリストの多くは当合唱団の会員であるか、会員同様に親しくしていただいている方です。また、管弦楽では蒲生克郷さんをコンサートマスターとする、東京バッハ・カンタータ・アンサンブルのメンバーにも、これまで幾度となくお世話になりました。

「ヨハネ受難曲演奏会」企画の発端は、一昨年暮れに当合唱団が実施した「第５回ドイツ演奏旅行」における秋の事前調査旅行の折り、ヴィンシャーマン先生のお宅を訪問した時に話題が出たことによります。以来、約１年４ヵ月にわたって企画を温め、音楽事務所等の力をほとんど借りることなく、合唱団手作りによる演奏会実施にこぎつけることができました。ドイツ語による歌唱の内容を、ストーリーとしてもできるだけわかりやすく聴いていただけるよう、ステージには日本語の字幕装置を準備いたしましたが、この原稿も当合唱団の会員と関係者によるオリジナルの合作です。

最後になりましたが、指揮者のヴィンシャーマン先生はもとより、素人の合唱に快くお付き合いいただきます声楽ソリスト、管弦楽メンバーの皆さん、当合唱団の結成と成長を温かく見守ってくださったＯＢ、関係者の方々、指導者の佐々木先生、伴奏者の劔持先生、そして何よりお忙しい中この演奏会にお出でいただいた皆さまに、深く感謝する次第です。

２時間余りのステージ、今日まで１年余りの練習で培ったエネルギーで、一気にヨハネ受難曲を歌い上げます。どうぞご期待ください。

❖ 出演者プロフィール

ヘルムート・ヴィンシャーマン
Helmut Winschermann

1920年3月22日、ルール地方ミュールハイムに生まれた。エッセンとパリで学び、ヘッセン（フランクフルト）放送交響楽団、コンセルトヘボウ（アムステルダム）などのソロ・オーボエ奏者を務めた。その他、数々の室内楽団のリーダーを経て、1960年フランクフルトにおいてドイツ・バッハゾリステンを創立。以来、芸術監督として、今日まで45年余り全責任を持ち、この室内楽オーケストラを独特のスタイルを持つアンサンブルに育て、特にバッハ演奏において世界的に権威ある演奏団体にした。ヴィンシャーマンは、オーボエを手にしても、指揮棒を握っても、ステージに立つときは、常に、「明晰に、生き生きと、喜ばしく」という彼のモットーを貫いてきた。

ドイツ・バッハゾリステンのメンバーは、初めからヴィンシャーマンの芸術と人格を慕って集まってくる、著名なオーケストラの首席奏者や音楽大学の教授である彼の友人たち、およびその優れた弟子たちで構成されている。年配者と若い世代がバランスよく混ざり、メンバーも一定でないために、マンネリ化が避けられ、常にフレッシュな空気がアンサンブルにもたらされている。

音楽監督としては、「フランクフルト・バッハ演奏会」（20年間）、ケルン・バッハ協会の「オーケストラ演奏会」（7年間）などを手掛け、1983年からはリューデンシャイツ市で、市とドイツ政府の援助のもとに「リューデンシャイツ・バッハ週間」を主宰した。ドイツ・バッハゾリステンを率いて、あるいは客演指導者として世界各地での演奏会のほか、地元のボンのベートーヴェンホールやケルンのブリュール城でも定期的にコンサートを開いている。

日本では、1962年以来ドイツ・バッハゾリステンとの来日以外に、客演指揮者としていくつかの日本の合唱団やオーケストラを指揮し、合唱を伴う教会音楽ーバッハ『マタイ受難曲』『ヨハネ受難曲』『カンタータ』『クリスマス・オラトリオ』、ヘンデル『メサイヤ』などーでも、友人のクルト・トーマスに学んだ指揮法を駆使して特筆すべき成果を上げている。また、種々の音楽祭や講演で熱心な指導を行っており、日本の若い音楽家が彼から受けた影響は少なくない。

一世を風靡した名オーボエ奏者として知られる一方、ヴィンシャーマンは優れた教育者としても知られ、1956年デトモルト国立音楽大学の教授に就任。オーボエと室内楽のマスタークラスを受け持ち、「歌うオーボエ奏者」と称される彼のクラスには世界各地から学生が集まり、優秀な後継者を輩出した。ハンスイェルク・シェレンベルガー（ベルリン・フィル）、宮本文昭（元ケルン放送響）、インゴ・ゴリツキ（シュトゥットガルト国立音楽大学）、ゲルノート・シュマールフス（デトモルト国立音楽大学）、リヴィオ・ヴァルコール（フランクフルト放響）など、それ

ぞれのオーケストラの首席オーボエ奏者または大学の教授として活躍している。

『ブランデンブルク協奏曲』『音楽の捧げもの』『フーガの技法』『ゴルトベルク変奏曲』、合唱を加えての『四大宗教曲』などのバッハのオーケストラ作品の大曲が近年のヴィンシャーマンのプログラムの中心を占めているが、その他に、モーツァルトのピアノ協奏曲、セレナード、バレエ音楽、メンデルスゾーンのバレエ音楽など、意欲的にレパートリーを広げており、特にモーツァルトのレコード録音に対しては、最上の評価を得ている。

また、著名な作曲家、ギゼルヘア・クレーベは、ヴィンシャーマンとドイツ・バッハゾリステンのために『ストラヴィンスキーの墓』という曲を書き、献呈している。

近年の公演評は、彼のモダン楽器によるバッハ演奏を高く評価している。日本やヨーロッパの大きなホールでは、モダン楽器を用いた方が聴衆はバッハの音楽をより理解することができるだろう。古楽器はすばらしいが、その魅力的な響きはヨーロッパの城にあるような小さなホールでこそ生かすことができる。ドイツ・バッハゾリステンのメンバーたちは古楽器の演奏にも通じている。ちょうどヴィンシャーマンが10年にわたってバロック・オーボエを演奏したように。

音楽学者でもあるヴィンシャーマンは、多くのバロック音楽の楽譜をジコルスキー社より出版、またレコードはドイツ・グラモフォン、ベーレンライター、フィリップス、RCA、ナミ・レコードなどより100枚程出している。なお、バッハゾリステン結成以前にバロック・オーボエも演奏した彼は、ドイツで最初のバロック・オーボエによるレコード録音を行っている。近年では、CDでフィリップス、カプリチオ、インターコードなどよりバッハの協奏曲、ヘルマン・プライ、エディタ・グルベローヴァとのカンタータなどがリリースされている。

ドイツ政府より最高の一等功労十字勲章、レコードに対して権威あるエディソン賞2回、グスタフ・マーラー賞、1991年度ドイツ・ヘンデル賞など、多くを受賞している。1992年ロンドンで王立音楽アカデミー委員会満場一致にて「名誉会員」の称号を授与された。

1998年1月、ユネスコ本部からの依頼でパリにおいて『平和のためのチャリティー・コンサート』を指揮、絶賛を博した。

佐々木　正利
〈合唱指揮〉

東京芸術大学声楽科卒業。同大学院修士及び博士後期課程修了。須賀靖元（声楽）、服部幸三（音楽学）、小林道夫（演奏法）、森晶彦（発声法）、松本民之助（作曲）、岳藤豪希（宗教音楽）の各氏に師事。

1973年にバッハ「クリスマス・オラトリオ」の福音史家で楽壇デビューして以来、バッハをはじめとする宗教音楽のスペシャリストとして揺るぎない地位を得ている。1979年シュトゥットガルトに渡りL.フィッシャー教授に師事。1980年第6回ライプツィヒ国際バッハコンクール声楽部門第5位入賞。同年より1982年までデットモルト北西ドイツ音楽大学に学び、H.クレッチマール教授に師事。在独中は欧州各国の演奏会に招かれ、特に1980年ウィーン楽友協会ホールでのマタイ受難曲では『若き日のP.シュライヤー』と新聞各紙で絶賛される。

帰国後もライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団、ベルリン交響楽団、国立ブカレスト交響楽団、NHK交響楽団等、世界、日本の著名なオーケストラのソリストとして度々起用され、K.マズア、H.シュタイン、H.ブロムシュテット、小澤征爾、岩城宏之等、世界を代表する数々の指揮者と共演。また世界的宗教音楽の名指揮者であるH.リリング、H.J.ロッチュ、M.コルボ、R.ヤコブス等率いる、シュトゥットガルト・バッハ合奏団、ゲヒンゲン聖歌隊、聖トマス教会聖歌隊、RIAS室内合唱団等の演奏会に度々出演し、高い評価を得ている。特に世界的バッハ指揮者H.ヴィンシャーマン率いるドイツ・バッハゾリステンの演奏会には、ソリストとしてだけでなく自身が育てた合唱団も度々共演し、その歌唱力、合唱指導力によって絶大な信頼を勝ち得ている。

1985年ザルツブルク音楽祭に招聘され、モーツァルテウム管弦楽団、ベルリン聖ヘドヴィッヒ聖歌隊とバッハ「マニフィカート」、モーツァルト「戴冠ミサ」を共演し好評を博した。在独中オペラでは、ヴェストファーレン州立歌劇場等で、コジ・ファン・トゥッテのフェランド、フィデリオのヤッキーノ、スカルラッティ・グリゼルダのコッラード役で出演。現在までリサイタル21回を数え、レコード・CDも多数リリース、またテレビ、FM等にも度々出演している。

1970年東京芸術大学バッハ・カンタータ・クラブの創設に携わり、多くの後進を育てると共に指揮者としての活動を開始。以後約30数年に亘って主に宗教曲の演奏に冴えをみせ、そのいずれもが名演の誉れ高い。特に盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハ・カンタータ協会等を率いての10度にわたるドイツ公演では、『シュッツ、バッハの世界的担い手』とした最大級の賛辞が新聞各紙に掲載され、1993年のヴィンシャーマンとのマタイ受難曲では『マタイ演奏史上、最も特筆されるべき演奏の一つ』、また1995年のJ.ツィルヒとの天地創造では『音楽と言葉の見事なまでの融合』と、その音楽作りが絶賛された。1987，88年には、リリング音楽監督のバッハ・アカデミーにてTen.マスタークラスの講師を務め、またコダーイ・サマースクールや古楽サマースクール等でも指導講師に招かれるなど、その指導力については世界的に定評がある。

1994年長年にわたる顕著な演奏・教育の業績に対し、第47回岩手日報文化賞（学芸部門）が贈られ、また2000年にはアメリカ・イオンド大学より名誉博士号が授与された。

現在岩手大学教育学部教授。二期会会員。日本声楽発声学会、日本音楽表現学会、日本発声指導者協会、仙台バッハ・アカデミー、各理事。仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハ・カンタータ協会、オーケストラ・アンサンブル金沢合唱団、東京21合唱団、東北大学混声合唱団、岩手大学合唱団、盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、各指揮者。二期会バッハ・バロック研究会講師。

❖声楽ソリスト

五郎部 俊朗〈福音史家〉

北海道教育大学卒業。リア・グアリーニ、五十嵐喜芳、佐々木正利の各氏に師事。86年渡伊、ミラノにて研鑽を積み、トーティ・ダル・モンテ（1位）、トゥールーズ（2位）、チャイコフスキー（バッハ賞）など数々の国際コンクールで入賞。イタリア・トレヴィーゾ市立歌劇場、スイス・ビール市立歌劇場に出演。90年帰国し、藤原歌劇団の「ドン・ジョヴァンニ」で日本デビュー。「チェネレントラ」「夢遊病の女」で成功を収め、第19回ジロー・オペラ賞「新人賞」受賞。その後も「セビリアの理髪師」「愛の妙薬」「魔笛」「アルジェのイタリア女」「メリー・ウィドウ」「こうもり」その他、数多くのオペラ・オペレッタに出演し好評を博す。日本では数少ないレッジェーロの主役テノールとして、その軽やかな高音は独特な魅力を醸し出している。また宗教曲などのソリストとしてオーケストラや合唱団への客演も数多い。リサイタルでは、ドイツ歌曲・イタリア歌曲等を中心とした本格的なものから、トークを交えて日本の抒情歌・世界の民謡等を歌う、親しみ易いプログラムまで、幅広く行っている。CDも合計10枚リリースしている。

現在、藤原歌劇団団員、東京室内歌劇場会員。

多田羅 迪夫〈イエス〉

東京芸術大学卒業、同大学院修了（在学中に安宅賞受賞）。

第16回ジロー・オペラ賞受賞。

1977年ゲルゼンキルヒェン市立劇場と契約、数々のオペラやコンサートに出演、M.フレーニ、R.パネライ等と共演した。

帰国後、1983年二期会公演『ジークフリート』のアルベリッヒを、更に1985年新日本フィルオペラティックコンサート『ヴォツェック』（小澤征爾指揮）のタイトルロール、『ラインの黄金』『ジークフリート』のアルベリッヒ、『神々の黄昏』のハーゲン『ペレアスとメリザンド』のゴロー、『エレクトラ』『俊寛』『天守物語』、1990年二期会創立40年記念公演と、フィンランドのサヴォンリンナ・オペラ・フェスティヴァル参加『お蝶夫人』でシャープレスを演じ国際的評価を得た他、『フィガロの結婚』フィガロ、続く1991年の『リゴレット』でもタイトルロールを演じた。また同年10月にはW.サヴァリッシュ指揮『魔笛』に弁者役、1992年二期会オペラ『ドン・ジョヴァンニ』タイトルロール、同年『さまよえるオランダ人』オランダ人『オィディプス王』、1994年『トスカ』のスカルピア（以上小澤征爾指揮）、『フィデリオ』のドン・ピツァロ（朝比奈隆指揮）等、1996年二期会オペラ『ワルキューレ』でヴォータンを演じた。1998年『魔笛』弁者役で新国立劇場に出演。二期会創立50周年公演2002年ベルギー・モネ劇場と提携公演『マイスタージンガー』のザックス、2003年宮本亜門演出『フィガロの結婚』の伯爵を、2005年にはA.ツェムリンスキー『フィレンツェの悲劇』のシモーネ、『さまよえるオランダ人』のタイトルロールを務めた。

コンサートへの出演も多く、「第九」、バッハ「受難曲」「カンタータ」、ハイドンのオラトリオ、モーツァルト「ミサ曲」「レクイエム」、ブラームス「ドイツ・レクイエム」、フォーレ「レクイエム」、マーラー「千人の交響曲」等をレパートリーとし、高い評価を得ている。

東京芸術大学教授・二期会会員。

小原 浄二〈ピラト、ペテロ〉

岩手大学卒業後、東京芸大声楽科に進学し首席で卒業。松田トシ賞受賞。同大学院独唱科修了。森肇子、佐々木正利、伊藤亘行、多田羅迪夫の各氏に師事。ドイツリート、オラトリオを中心に研鑽を積み、東京芸大時代には小林道夫氏のもとバッハカンタータクラブに所属し研究・演奏を行う。その後、国内外の演奏会にソリストとして出演。1992～1994年には鈴木雅明氏が音楽監督を務めるバッハコレギウムジャパンのコーラスマスター及びソリストとして活躍。1994～1995年、ドイツに留学し、H.クレッチマールに師事すると共に多数の演奏会に出演。特に、ミュンヘン、ヘラクレスホールにおけるニュルンベルク交響楽団定期公演、J.ツィルヒ指揮、ハイドン「天地創造」バスソロなどは、現地新聞紙等において絶賛される。帰国後も全国各地に招かれソロ活動を行い、宗教音楽の世界的名指揮者である、H.J.ロッチュ、G.Ch.ビラー等との共演や、新日本フィルハーモニー交響楽団定期公演における、G.ボッセとの共演のほか、関西フィル、オーケストラ・アンサンブル金沢、紀尾井シンフォニエッタ東京、スウェーデン放送合唱団などとの共演で高い評価を得ている。

現在、高知大学教育学部助教授。高知バッハカンタータフェライン指揮者。アンサンブル《BWV2001》メンバー。

井上 しほみ ヘラー〈ソプラノ〉

岐阜県大垣市出身。東京芸術大学音楽学部声楽科卒業、同大学院修了。木村宏子氏に師事。ウィーン国立音楽大学リート・オラトリオ科卒業。ローベルト・ショルム、アーリン・オジェーの両氏に師事。ヘルトーゲンボッシュ（オランダ）国際声楽コンクール声楽部門第2位、現代音楽部門第1位入賞。ウィーン国際リートコンクール（後期ロマン派歌曲）第3位入賞。ウィーン音楽祭、ホリゾンテベリルンなどの国際音楽フェスティバルに出演。ウィーン楽友協会ホール、ベルリンフィルハーモニーホール、アルテオペラフランクフルトなど、由緒ある音楽ホールで演奏。数多くのリサイタルを行うと共に、オラトリオ作品のソプラノ・ソリストとして、ヘルムート・リリング、ウーヴェ・グロノスタイなどの国際的指揮者、ベルリンラジオシンフォニーオーケストラ、バッハコレギウム・シュトゥットガルトなどのオーケストラと共演。レコード、CD録音、数々のラジオ放送局での実況録音、スタジオ録音などでも活躍を続ける。また、現代作曲家の作品の世界初演を多く果たす。

現在、アウグスブルク大学教育学部音楽科にて教鞭をとる。

佐々木 まり子〈アルト〉

東京芸術大学声楽科卒業。同大学院修士課程独唱専攻修了。毎日学生コンクール西日本第1位。NHK新人演奏会出演。伊藤亘行、小林道夫、森明彦の各氏に師事。1980年にデットモルト北西ドイツ音楽大学に留学し、ヘルムート・クレッチマール、ハンス・クールマンの両教授に師事。ドイツ・リート、オラトリオ歌唱法並びにドイツ語舞台発音法の研鑽を積む。その間、北ドイツを中心にバッハをはじめ数多くの宗教音楽、歌曲演奏会に出演。帰国後もヘルムート.ヴィンシャーマンと、バッハ「クリスマス・オラトリオ」で共演したのをはじめ、バッハ、ヘンデルのカンタータ、オラトリオ演奏会に多数出演。温かく豊かで深みのある歌唱によって、東京を中心に、札幌、弘前、盛岡、仙台、横浜、名古屋の各地で活躍している。月が丘教会チャペルコンサートを長年企画・指揮。近年は全日本合唱連盟主催の「おかあさんカンタート」にて発声講座の講師を務める。

女声合唱団グレイセスもりおか、アンサンブル・コン・フォーコ指揮者。仙台宗教音楽合唱団、東北大学混声合唱団、岩手大学合唱団各ヴォイストレーナー。グルッペ・ベッヒライン会員。

鏡　貴之〈テノール〉

岩手大学教育学部芸術文化課程音楽コース卒業。現在、東京芸術大学大学院修士課程(独唱専攻)在学中。声楽を佐々木まり子、佐々木正利、多田羅迪夫の各氏に師事。主に宗教曲、オラトリオのソリストとして、東京近郊を中心に活動中。特にJ.S.バッハの作品は「クリスマス・オラトリオ」、「ヨハネ受難曲」、「ロ短調ミサ曲」や、多数の教会カンタータのソロを務め、活動の中心となっている。他に、モーツァルト「レクイエム」、ハイドン「十字架上の七つの言葉」、シューベルト「ミサ曲第6番変ホ長調」、ベートーヴェン「第九」、芸大合唱定期でブルックナー「テ・デウム」、「ミサ曲第3番ヘ短調」のソロを務める。オペラの分野では、モーツァルト「魔笛」の僧侶、武士役。芸大モーニングコンサートでモーツァルト「魔笛」のタミーノ役を務め、好評を博す。他に、子供を対象とした芸大のコンサート「芸大とあそぼう」でソロを務め、活動の場を広げている。

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、芸大バッハ・カンタータ・クラブ、21合唱団、日本声楽発声学会、グルッペ・ベッヒライン各会員。

佐々木 直樹〈バス〉

岩手大学教育学部音楽科卒業。東京芸術大学音楽学部声楽科を経て、同大学大学院修士課程独唱専攻修了。声楽を小原一穂、佐々木正利、佐々木まり子、伊藤亘行、多田羅迪夫の各氏に師事。芸大在学中、小林道夫氏の指導のもとにおける東京芸術大学バッハ・カンタータ・クラブに在籍し、数々の演奏会においてソリストを受け持つ。これまでにJ.S.バッハの数々の教会カンタータ、ミサ曲、「ヨハネ受難曲」、「マルコ受難曲」、「クリスマス・オラトリオ」、モーツァルトのミサ曲、ヘンデル「メサイア」、サン・サーンス「レクイエム」、フォーレ「レクイエム」、デュリュフレ「レクイエム」など、宗教曲を中心にソリストとして多くの合唱団と共演。2001年芸大定期演奏会メンデルスゾーン「エリア」のタイトルロール、2002年芸大メサイア公演のソリストを務める。また、2006年2月には、ミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」にトラップ大佐役で出演、活動の幅を広げている。2003年10月～2006年3月岩手大学教育学部音楽科非常勤講師。

現在、島根大学教育学部芸術表現教育講座講師。日本声楽発声学会、盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、グルッペ・ベッヒライン各会員。

❖オーケストラ

蒲生 克郷
〈コンサートマスター〉

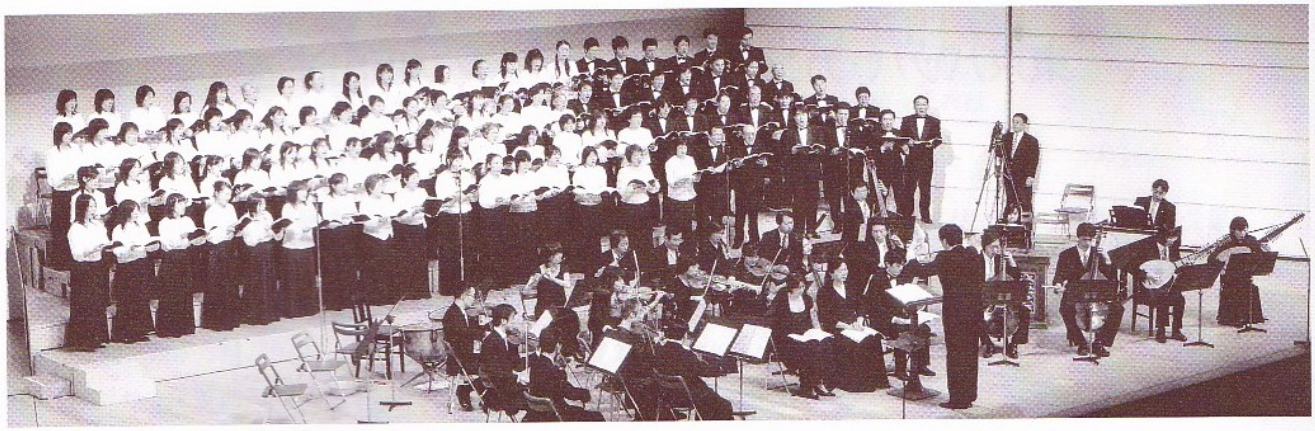
東京芸術大学卒業。NHK-FM「夕べのリサイタル・新人演奏会」に出演。1976～78年渡独。ヒルデスハイム市立歌劇場管弦楽団奏者、ヒルデスハイム室内管弦楽団コンサートマスターを務める傍ら、ヴュルツブルク音楽大学にて研鑽を積む。帰国後は室内楽を活動の中心とし、憩弦楽四重奏団、東京バロックアンサンブル、東京バッハアカデミー、久合田緑弦楽四重奏団などで活躍する一方、東京芸大バッハ・カンタータ・クラブ、盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、盛岡バッハアンサンブルの指揮者を務めた。1987～88年神戸女学院大学講師。

現在、東京芸術大学管弦楽研究部講師、及び同部（芸大フィルハーモニア）コンサートマスター、エルデーディ弦楽四重奏団第1ヴァイオリン奏者、アンサンブルofトウキョウメンバー。日立室内アンサンブル、水戸ジュニアオーケストラ、ひたちジュニア弦楽合奏団各指揮者。故多久興、海野義雄、故ボリス・ゴールドシュタインの各氏に師事。

劔持 清之
〈オルガン・合唱団伴奏者〉

国立音楽大学卒業。チェンバロを西川清子、水野均の各氏に師事。92年より盛岡バッハ・カンタータ・フェラインの伴奏者を務める。佐々木正利氏、岩城宏之氏、H.J.ロッチュ氏指揮の盛岡バッハ・カンタータ・フェライン演奏会、パリ・ユネスコホールでのH.ヴィンシャーマン指揮バッハ「ロ短調ミサ曲」などにおいて通奏低音を務める他、チェンバロリサイタル、デュオコンサート等近年各種演奏会においてチェンバロ、通奏低音奏者として活躍の場を広げている。

盛岡大学短期大学部助教授。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン伴奏者。グルッペ・ベッヒライン会員。



東京バッハ・カンタータ・アンサンブル
〈管弦楽〉

東京芸術大学の学内サークルとして30年来小林道夫氏のもとで活発な活動を続けていた団体に「バッハ・カンタータ・クラブ」というのがあるが、そのOBを中心に、卒業後もなおバッハやヘンデル等の器楽曲、宗教音楽の分野に於ける演奏活動を続けようと有志が集ったのが「東京バッハ・カンタータ・アンサンブル」である。メンバーは各自がソリスト、室内楽、オーケストラ等、各方面で活動しているため多少流動的ではあるが、この名称のもとで演奏活動を始めてから既に20年を経て、バッハ、ヘンデルを中心としたバロックの器楽曲、宗教音楽の数少ない演奏研究団体として、その様式感にのっとった生き生きとした演奏には定評がある。

過去においては、W.ヤーコプ、H.ヴィンシャーマン、E.ヴァイアント、H.J.ロッチュ、P.ノイマン、小林道夫、黒岩英臣等、内外の演奏家との共演をはじめ、バッハ合唱団、CMA合唱団等、全国各地の合唱団と共演している。

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
〈合　唱〉

1977年「カンタータを歌う会」として発足。以来、一貫してJ.S.バッハの作品を中心としたドイツ・バロック合唱曲の研究、演奏を行っている。その演奏が、1991年ドイツにおいて「作品の語感、音、そして精神の完熟」という現地新聞の批評を受けるに至るまでには常任指揮者、佐々木正利のドイツ・バロック音楽に対する卓越した見識に基づく、熱意溢れる指導の積み重ねがあった。佐々木は超一流のエヴァンゲリストとして評価されるその発音、語感、様式感をもう一つのライフワークである合唱団の育成に注ぎ込み、その結果「〈言葉が生きる〉と〈音楽が生きる〉とは歌の世界では同義語である」というフェラインの音楽信条が演奏上の身上となるに至ったのである。

その後、H.ヴィンシャーマン、H.J.ロッチュ、J.ツィルヒ、岩城宏之等、世界的指揮者との共演を重ね、各指揮者より、ドイツ・バロック音楽を音楽的かつ人間的に表現できる合唱団として、熱い評価を得るようになった。この評価は、声の充実を追求する合唱団や、古楽器的な歌唱法を駆使して鮮烈な表現を目指す合唱団に与えられるものとは性格を異にする。暖かい音色を基調としながら、音楽の刻々と変化する様相を、その時々に相応しいニュアンスで大胆かつ繊細に、確信を持って表現しきろうとする、あくまで人間バッハへの共感を基調とする合唱団に対してのものなのである。

ミュンヘンのヘラクレスザールでハイドンの「天地創造」を演奏する（ニュルンベルク交響楽団）同じ週に、各地教会でア・カペラの小品を歌う。フェラインは、常に盛岡の教会での練習で培ったトーンを原点として活動してきた。

2003年11月に盛岡、12月には東京で、それぞれH.ヴィンシャーマン指揮のドイツ・バッハゾリステンと、バッハの「マタイ受難曲」を演奏し絶賛を博した。2005年1月には盛岡にてバッハ「マルコ受難曲」を演奏、また2005年12月には第5回ドイツ演奏旅行を企画し、ヘンデル「メサイア」、バッハ「クリスマス・オラトリオ」、ベートーヴェン「第九交響曲」を演奏し、大きな感動を呼んだ。

H.ヴィンシャーマン氏との共演は「マタイ受難曲演奏会」以来4年ぶり。東京バッハ・カンタータ・アンサンブルとの共演は、「マルコ受難曲演奏会」以来2年ぶり。

東京バッハ・カンタータ・アンサンブル出演者

《フルート》

立川 和男・阿部 博光

《オーボエ》

小畑 善昭・中根 庸介

《ファゴット》

寺下　徹

《第1バイオリン》

蒲生 克郷（コンサートマスター）

花崎　淳生・大谷 美佐子・松川 裕子・高木　聡

《第2バイオリン》

海保 あけみ・桐山 建志・吉田　篤・長岡 聡季

《ビオラ》

李　善銘・深沢 美奈・幡谷 久仁子

《ビオラ・ダ・ガンバ》

福沢　宏

《チェロ》

大木 愛一・西沢 央子

《コントラバス》

田邊 朋美

《リュート》

永田 平八

《オルガン》

劔持 清之

《ヨハネ受難曲》鑑賞の手引き

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン　コンサートマスター　佐々木幹雄

本日演奏する《ヨハネ受難曲》はバロック時代の音楽家J.S.バッハ（1685-1750）が『ヨハネによる福音書』の受難の記事（第18章、第19章）に基づいて作曲したものです。「受難」とは、神の子であるイエスが捕らえられ、十字架につけられ、殺されたことを言います。そのことは同時に、ユダヤの聖典である旧約聖書の預言が成就することでもあり、これはイエスの死によって人間を罪から救おうとする神の愛によるもの、とキリスト教では考えられています。

この《ヨハネ受難曲》は1725年にライプツィヒの聖ニコライ教会での晩課のために作曲され初演されました。ドイツ・プロテスタント教会の伝統に則って第1部と第2部に分けられていて、本来はその間に牧師による説教が行われました。

以下では、まず【受難物語のあらすじ】と【受難曲の様式】について概説します。その後【ヨハネによる福音書】【台本】【音色の工夫】【繰り返しによる統一】というキーワードを使って、この《ヨハネ受難曲》についてさらに詳しく解説します。本日の演奏へのご案内となれば幸いです。

あらすじ

（（カッコ）内は聖書に書かれている物語以外の曲で、物語の途中に挿入されています。）

背　景

物語はおよそ2000年前のパレスチナの地が舞台です。神による「選ばれし民」であるイスラエル人たちは次々に登場する預言者の言葉に従い、律法を守り、神を讃美していました。しかしローマ帝国により地中海周辺が支配され、イスラエル人たちもローマの属州の民として支配下におかれていました。そんなとき、ナザレ村出身の一人の若者イエスが、神のみを信じ隣人への愛をもって行動することが神の望まれることであり、そうすることによってのみ人間は救われるのだ、と12人の弟子を伴いながら説教して各地を歩いていました。

しかし、神のみを信じるという教えはローマ帝国の体制側からは危険思想と見なされました。なぜなら、ローマ皇帝の命令と神の教えが対立するとき、人々が反ローマ的な行動に出るかもしれないからです。また、愛をもって行動するという教えは律法を守ってきたユダヤのとりわけ支配的な知識階級の人々から危険思想とみなされました。なぜなら、イスラエル人の指導者たちの既得権が脅かされることになるからです。そこでイスラエルの指導者たちはイエスの弟子の一人、ユダをしてイエスを裏切らせ、イエスを捕らえようとたくらむのでした。

第1部

（冒頭の、主を讃美する合唱［第1曲］に続いて）物語はすぐに《イエスの捕縛》の場面から始まります。ゲッセマネの園に集まっていたイエスと弟子たちのところに、ユダを先頭にした兵士や祭司長、ファリサイ人らの一群がイエスを捕らえにやってきます。イエスは、私を探しに来たのだから弟子たちはそのままにさせなさい、と群衆に言います（その「大きな愛」をたたえるコラール［第3曲］）。しかし弟子の一人シモン・ペテロが剣を抜いて斬りつけます。するとイエスは剣を納めるようにペテロを諭します（イエスを導く主の御心を讃美するコラール［第5曲］）。

こうしてイエスは大祭司カイアファのしゅうとであるアンナスの屋敷へと連れて行かれます（イエスの捕縛の意味を説くアルトのアリア［第7曲）］。捕らわれたイエスの後をペテロともう一人の弟子の2人が追っていきます（主に従う喜びのアリア［第9曲］）。ここでの中心人物は堅い信仰をもつペテロ。彼はアンナス邸の門から中に入るなり、門番の女にイエスの弟子であることを指摘され、つい「違います。」と否定してしまいます。邸の中ではアンナスがイエスを尋問し、イエスは多弁に答えますが従者に平手で打たれてしまいます（自分たちの罪が原因であると歌う

コラール［第11曲］）。尋問の間、外で暖をとっていたペテロはそこの人々に弟子の一人であることを指摘され、再び否定します。さらに大祭司の手下に指摘され、ペテロはまたまたイエスとの関係を否定してしまうのでした（後悔するアリア［第13曲］と第1部をまとめるコラール［第14曲］）。

✣ 第2部

（第1部を振り返りこれからの出来事の意味を伝えるコラール［第15曲］の後、）場所はローマ総督ピラトの総督官邸に移ります。捕らえられた夜が明け、朝になっていました。総督官邸前にはユダヤ人たちが、イエスを罪人として引き渡すべく集まっていました。ピラトは官邸内に入りイエスに「おまえはユダヤの王なのか?」と尋問します（イエスを王と讃える会衆のコラール［第17曲］）。尋問によって罪を見いだせなかったピラトが邸の外に出て、バラバという殺人者とイエスのどちらを釈放することを望むかとユダヤ人たちに選択させると、ユダヤ人たちはバラバを選びます。これによってイエスの捕らわれは確定し鞭で打たれました（その姿をしかと見つめるよう呼びかけるアリオーソ［第19曲］とこの事態について熟考をうながすアリア［第20曲］）。

とりまく兵士たちによってイエスはからかわれます。ピラトは邸の外のユダヤ人たちに、罪を見いだせないイエスの姿を見せようと外に連れ出します。しかし人々はますます熱狂して「十字架につけろ!」と叫びます。しかも、罪を認めていない総督ピラトに対して、「自分たちの律法によれば彼は死刑だ」と主張するばかりなので、ピラトはイエスに罪状についてさらに尋問しますが、罪は見いだせません（イエスの捕らわれが自分たちの自由をもたらしたとするコラール［第22曲］）。それでもユダヤ人たちはローマ皇帝を引き合いにして処罰をピラトに迫りました。そこでピラトはイエスを裁判にかけます。

時はすでに昼。ユダヤの群衆たちが「殺せ。」「皇帝以外に王はいない。」と叫び続けるので、ピラトはイエスを彼らユダヤ人たちに引き渡しました。そして十字架を背負わされてゴルゴタの丘へと向かわせられるのです（悩める魂への呼びかけの合唱付きアリア［第24曲］）。

場面をゴルゴタの丘に移し、十字架に付けられたイエスの上には罪状書きが張り出されています。ユダヤ人たちはその訂正を求めますが、ピラトは応じませんでした（十字架を頼みとする会衆のコラール［第26曲］）。

その後、兵士たちがイエスの衣服の取り合いを始めます。その後イエスは十字架の傍らにいたマリアと弟子にむかって、今後の後見を指示します（愛の深さを讃えるコラール［第28曲）］。

全てが成就した後、イエスは「果たされた。」とつぶやきます（使命の成就を静かにそして高らかに讃えるアリア［第30曲］）。そして息をひきとります（その意味を問うコラールつきアリア［第32曲）］。すると天変地異がおこります（全世界の悲しみを歌うアリオーソ［第34曲］と溢れ出る涙を歌うアリア［第35曲］）。続いて、イエスの遺体のその後についても旧約聖書の預言の成就であることが語られます（受難の意味を説くコラール［第37曲）］。

最後に、イエスの遺体を弟子の一人が亜麻布に包んで埋葬しました。それは受難の出来事のしめくくりであると同時に、復活への備えでもありました（守歌のような別れの合唱［第39曲］、復活と栄光を讃えるコラール［第40曲）］。

受難曲の様式

この《ヨハネ受難曲》は、1724年4月7日にドイツ中部の都市ライプツィヒの聖ニコライ教会で初演され、その後1725年、1732年、1749年に再演されたことがわかっています。いずれも教会暦で言う「聖金曜日」の晩課で演奏されました。当時の教会音楽は礼拝に際して神を讃えると同時に教会に集う会衆に働きかけることで宗教的な思いを抱かせるといった、主に2つの目的で作られていました。今日言うところの音楽作品、つまり創作者自身の自己表現としての「作品」とは、創作の動機がだいぶ違います。

聖週間とはおよそ3月末から4月初めにあたる時期ですが、バッハが生きた時代のドイツ・プロテスタント教会では、その聖金曜日に受難曲を演奏する習慣がありました。これは聖書の受難に関する記事を音楽化するものです。その昔は登場人物ごとに役割を分担して朗読するスタイルから始まり、それが

歌になり合唱へと変化していきました。しかし基本的には華美な装飾を控える聖週間の催しなので、ア・カペラで（器楽伴奏なし）で演奏されていました。それがバロック時代になり、教会に器楽が導入されるにつれて、作曲技法としてもオペラで用いられるダ・カーポ・アリアやモノディなどの手法がとり入れられ、さらに会衆になじみの深いコラールも取り入れられるようになってきました。このようなタイプの受難曲を「オラトリオ風受難曲」と呼びます。本日演奏する《ヨハネ受難曲》もこの様式で書かれています。テキスト（歌詞）の上でも変化が起こり、聖書の言葉（これを「聖句」と言います）が中心であったものがしだいに自由詩やコラールが採用されるようになりました。受難物語の場面場面に合致した心情を歌い上げるアリアやコラールとして歌われます。

この「オラトリオ風受難曲」では、受難の記事を事実として報告するエヴァンゲリストと呼ばれる福音書記者（物語の「地の文」を担当）や主要な登場人物の言葉の朗唱によって物語が進行します。これらは「通奏低音」と呼ばれる簡素な器楽伴奏で語るように歌われます。歌詞はルター訳の聖書の文言を忠実に歌います（ただし、《ヨハネ受難曲》にはバッハによって『マタイによる福音書』からの文言が2箇所だけ歌詞として引用されています）。この朗唱による物語の進行の合間合間に、多彩な音色の器楽伴奏で聴き手の心情を代弁するように歌われるアリオーソやアリアが、また教会に集っている会衆の共同の祈りであるコラールなどが挿入される、という基本構造をもっています。

声楽ソリストは登場人物やアリアの歌い手となります。合唱団は群衆など複数人の登場人物の言葉を歌ったりコラールの担い手となります。

ここでは、いくつかのキーワードに沿って、《ヨハネ受難曲》の音楽的な特徴を紹介していきます。

✣キーワード①「ヨハネによる福音書」

《ヨハネ受難曲》は『ヨハネによる福音書』の受難記事をテキスト（歌詞）の基本としています。受難に関する記事は新約聖書の『マタイによる福音書』『マルコによる福音書』『ルカによる福音書』のいずれにもあります。しかし（「共観福音書」と呼ばれる）これら3つの福音書と『ヨハネによる福音書』では性格がだいぶ異なります。3つの共観福音書は基本的に「イエスは何を行ったのか」「イエスの活動によってどのような変化が生じたのか」が書かれています。一方『ヨハネによる福音書』は「イエスはどのような存在か」「イエスは誰か、何か」ということが終始述べられています。つまり神の子イエスの存在自体に絶対的な意義がある、という立場です。

このような違いをバッハは音楽に反映させました。《マタイ受難曲》では人間的なイエス像をとらえ、イエスの悩みや苦しみを取り上げて音楽化しました。ですから「罪のないイエスが磔刑に処せられたのは我々の罪を贖うため」という点が浮き彫りにされます。一方《ヨハネ受難曲》ではイエスの死は「預言の成就」であり、受難の物語はそこに至る救済の過程としてとらえています。ですからイエスは常に堂々としており、例えばイエスが十字架上で「Es ist vollbracht.（成し遂げられた）」と語った後に歌われるアルトのアリア［第30曲］では「勝利」がヴィヴァーチェで表現されていますし、イエスの死後に歌われるソプラノのアリア［第35曲］をフィグーラ（情念を表す音型による修辞法）によって分析すると「主の栄光と復活」の情念が込められていることがわかります。

このように『ヨハネによる福音書』の本質をバッハは的確に捉え、それを聖金曜日の教会に集った人々の心に届け、また神に捧げようと作曲したと言うことができます。

✣キーワード②「台本」

聖句以外のテキストは自由詩とコラールに分けられます。

まず自由詩とは冒頭や最後に置かれている大きな合唱曲やアリオーソ（伴奏付きのレチタティーヴォ）、アリアの歌詞となっているものです。これはさまざまな詩集から採られています。例えば《マタイ受難曲》ではピカンダーという詩人の詩集からのみ採られています。しかし《ヨハネ受難曲》では3人以上の詩人の詩集から集められているのです。最も多いのはH.ブロッケスが1712年に発表した『世の罪のために責め苦を受け、死にたもうたイエス』という受難オラトリオの台本からの借用です。

「借用」といったのは、実はブロッケスの詩はあまりに飾り立てられた言い回しになっていて、ライプツィヒの教会会議が聖書の受難物語に忠実であることを強く望んだため、バッハ自身が詩に手を加えたと考えられているからです。

コラールとはドイツ・プロテスタント教会で伝統的に歌われている賛美歌です。この歌詞は教会ではなじみのあるものではありますが、厳密には聖句ではありません。コラールの役割は、教会に集う信者たちの共同の祈りを表現することです。耳慣れた旋律にのせて歌い慣れたテキストが受難の物語の中で歌われることによって、日々の祈りの意味をあらためて捉えなおすことでしょう。このようなコラールが全40曲中11曲（その他に1つはアリアの中に登場）も採り入れられています。これは《マタイ受難曲》（全68曲中コラールが13曲）よりも大きな割合を占めているといえます。つまり共同体として受難の意味を考え受け入れるように意図していると言えましょう。

このように《ヨハネ受難曲》の場合、聖書のどの部分にどのようなコラールを挿入しどのような自由詩を選んでよりふさわしく改作するかといった台本作成にまでバッハが関わっていた可能性が指摘されています。

✣キーワード③「音色の工夫」

12曲ある自由詩に音楽付けされた合唱やアリオーソ、アリアでは、実に様々な楽器が伴奏します。例えば第9曲のソプラノのアリアではユニゾンで演奏されるフラウト・トラベルソが2本（ユニゾンに付された意味はペテロともう一人の弟子が喜んでイエスの後に従うということ）、第19曲のバスのアリオーソではヴィオラ・ダモーレ2本とリュート、第30曲のアルトのアリアでは弦楽合奏に加えてヴィオラ・ダ・ガンバが、そして第35曲のソプラノのアリアではフラウト・トラベルソとオーボエ・ダ・カッチャが、それぞれ通奏低音と共に用いられています。

いずれも比較的特殊な音色の楽器です。多くの作品に一般的に使われているわけではありません。そのような楽器がこの《ヨハネ受難曲》のためにこんなにもたくさん必要とされるのはなぜでしょうか。それはバッハが受難物語のそれぞれの場面での情感や様子を表現するために必要な響きをつくりだすためだったと言えます。それほどにテキストからくるイメージを吟味し熟考して《ヨハネ受難曲》の音楽世界をバッハは作り上げたのでした。

✣キーワード④「繰り返しによる統一」

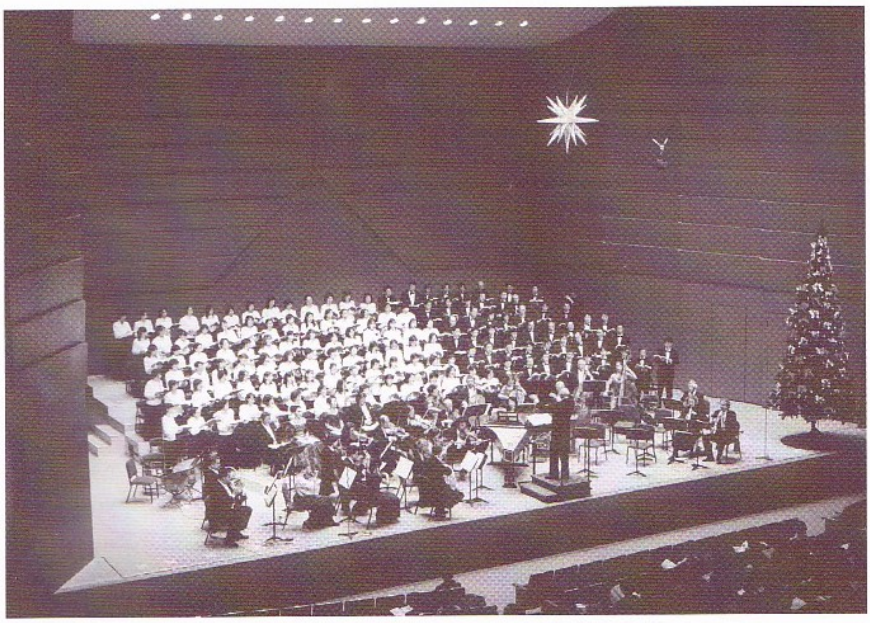
合唱の役割の一つに「トゥルバ」と呼ばれる群衆の言葉（聖句）に付された合唱曲があります。登場人物の一つとしての合唱です。《ヨハネ受難曲》ではこのトゥルバにおける繰り返しがいくつかあり、それが場面を枠づけたり統一感をつくり出したりしています。

まず第1部で人々が「ナザレのイエスを!」と答える場面。いずれもイエスの問いに対して2回［第3曲bとd］合唱が答えます。第2部の初めにピラトに対してユダヤ人たちが2回答える［第16曲bとd］ところでは、それぞれテキストは異なるものの半音階で上昇するモチーフを使って不穏な空気を表現しています。

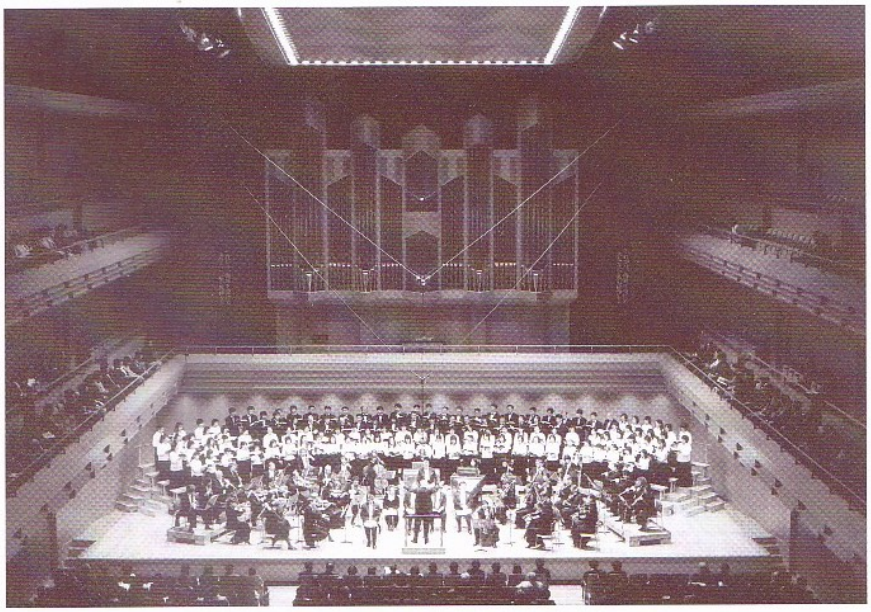
見事なのは「中核曲」と呼ばれる第22曲のコラールを中心として第17曲のコラールから第26曲のコラールまでのトゥルバの合唱の配置がシンメトリー（対称）構造をしていることです。これによって中核に位置するコラールの「あなたの囚われによって、神の子よ、私たちに自由がもたらされたのです。」という言（ことば）を《ヨハネ受難曲》全体の主題であるとバッハが位置づけているとする指摘もあります。

加えて、同じ合唱曲を繰り返し用いるという手法で、「神の救いの計画はすでに決定されていて、場面に登場する人物の言葉も行動も、実は次々と続く必然の結果なのだ」ということを、バッハが暗に示そうとしたのではないかという研究もあります。ここでも「ヨハネによる福音書」の本質をバッハは捉え《ヨハネ受難曲》に反映させていたのです。

2007 01/05



2000. 11.23　クリスマス･オラトリオ全曲演奏会



2003. 12.5　マタイ受難曲東京公演

盛岡バッハ・カンタータ・フェラインの歴史

1977年に結成以来「J.S.バッハの教会カンタータの研究と演奏を通して音楽芸術を追求する」ことを目的として、これまで、30年間活動を続けてきました。主な演奏会と演奏旅行の経過は以下のとおりです。

1977年	2月27日	「カンタータを歌う会」として発足		
	6月28日	「盛岡バッハ・カンタータ・フェライン」に改称		
1978年	2月26日	「バッハコンツェルト」	カンタータ45番、147番	指揮：小林道夫 （芸大と共演）
1979年	10月 6日	「BACH　ABEND」	カンタータ 158番、131番	指揮：小林道夫
1980年	2月27日	「バッハの夕べ」	カンタータ80番	指揮：小林道夫 （芸大と共演）
	12月22日	この年より「チャリティー・コンサート」を、盛岡市内のバロック音楽愛好家グループと共催(～1997年)		
1981年	7月 4日	「BACH　ABEND」	カンタータ 195番、182番	指揮：小林道夫
1982年	11月22日	「バッハの夕べ」	カンタータ 158番、4番	指揮：佐々木正利
1985年	3月16日 17日	J.S.バッハ生誕 300年記念演奏会 「ヨハネ受難曲」	ヨハネ受難曲	指揮：佐々木正利 （仙台宗教音楽合唱団と合同演奏）
	11月 3日	仙台北教会宗教音楽の夕べ「メサイア」	メサイア(G.F.ヘンデル)	指揮：佐々木正利
	11月29日	G.F.ヘンデル生誕 300年記念演奏会「メサイア」	メサイア(G.F.ヘンデル)	指揮：佐々木正利
1986年	4月11日	「宗教音楽の夕べ」	ドイツ・レクイエム (H.シュッツ)ほか	指揮：佐々木正利
	4月~5月	第1回ドイツ演奏旅行	ドイツ・レクイエム (H.シュッツ)ほか	指揮：佐々木正利
	7月11日	「東京ゾリステン演奏会」共演	スターバト・マーテル （ペルゴレージ）	指揮：赤松　安
1987年	3月28日	創立10周年記念演奏会「カンタータの夕べ」	カンタータ34番、70番、102番ほか	指揮：佐々木正利
	11月27日	ムシカ・デラルテ・トウキョウ演奏会 「バロック音楽の夕べ」（主催）		
1988年	3月12日 13日	仙台宗教音楽合唱団との合同演奏会 「ミサ曲ロ短調」	ミサ曲ロ短調	指揮：佐々木正利
	9月17日	「今仲幸雄バリトンリサイタル」（主催）		
	11月17日	「ミヒャエル・ショッパーバリトンリサイタル」（主催）		
1989年	4月24日	「二重合唱の夕べ」	モテット2番、5番 （J.S.バッハ)ほか	指揮：佐々木正利
1990年	3月10日 11日	盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、 仙台宗教音楽合唱団合同演奏会	クリスマス・オラトリオ4~6部、 ミサ曲ヘ長調(J.S.バッハ)	指揮：佐々木正利
	10月 1日	「アグネス・ギーベル　佐々木正利 ジョイントリサイタル」（主催）		
	12月～ 翌1月	第2回ドイツ演奏旅行	クリスマス・オラトリオほか	指揮：C.ポッペン 佐々木正利
1991年	3月10日	ドイツ演奏旅行帰国演奏会	モテット1，2番(J.S.バッハ)ほか、 ブクステフーデ、シュッツ	指揮：佐々木正利
	10月14日 18日	「カンタータ第140番、コーヒーカンタータ」	カンタータ140番、コーヒーカンタータ	指揮：H.ヴィンシャーマン （ドイツ・バッハゾリステンと共演）
1992年	3月21日	「バッハとメンデルスゾーンのカンタータの夕べ」	カンタータ93番ほか	指揮：佐々木正利

1993年	10月20日 24日 29日	「マタイ受難曲」（盛岡、仙台、岡山、東京）	マタイ受難曲（J.S.バッハ）	指揮：H.ヴィンシャーマン （ドイツ・バッハゾリステンと共演）
1994年	7月25日	「カンタータ147番」 仙台バッハアカデミーにおいて	カンタータ147番	指揮：佐々木正利 （仙台フィル・バッハアンサンブルと共演）
	12月18日	弘前市民クリスマス： G.F.ヘンデル「メサイア」演奏会に出演	メサイア（G.F.ヘンデル）	指揮：佐々木正利
1995年	4月末～ 5月	第3回ドイツ演奏旅行	天地創造（J.ハイドン）ほか	指揮：ヨセフ・ツィルヒ 佐々木正利
	8月26日	一関・東日本合唱祭参加	モテット6番ほか	指揮：佐々木正利
	9月26日	剱持清之・トリオフィオリーレ 「モーツァルト室内楽のタベ」（主催）		
	10月 8日	青山町教会チャペルコンサート	天地創造抜粋（J.ハイドン）ほか	指揮：小原一穂
	11月22日 23日	「天地創造」（盛岡、仙台） オーケストラ・アンサンブル金沢と共演	天地創造（J.ハイドン）	指揮：岩城宏之
1996年	3月15日	「バッハのタベ」演奏会	カンタータ21,131番、モテット4番	指揮：佐々木正利
1997年	4月13日	20周年記念演奏会	「昇天祭オラトリオ」 「マニフィカト」ほか（J.S.バッハ）	指揮：H.J.ロッチュ 佐々木正利
1998年	11月20日	「ヴィンシャーマンのロ短調ミサ」演奏会 盛岡コーロ・デラ・パーチェと共演	ミサ曲ロ短調（J.S.バッハ）	指揮：H.ヴィンシャーマン （ドイツ・バッハゾリステンと共演）
	12月12日	「盛岡いのちの電話」 チャリティーコンサート	カンタータ151番,191番 讃美歌数曲	指揮：佐々木幹雄
1999年	4月20日	シュッツのダビデ詩篇と バッハ、メンデルスゾーンのモテットのタベ	ダビデ詩篇曲3曲　モテット3番（J.S.バッハ） モテット3曲メンデルスゾーン	指揮：佐々木正利
	11月11日 12日 14日	第4回ドイツ演奏旅行 ケンペン・プロブスタイ教会　ボン・ベートーヴェンホール インゲルハイム・ザール教会	ミサ曲ロ短調（J.S.バッハ） ダビデ詩篇曲3曲　モテット3番（J.S.バッハ） モテット3曲メンデルスゾーン	指揮：H.ヴィンシャーマン （ドイツ・バッハゾリステンと共演） 指揮：佐々木正利
	12月22日	「盛岡いのちの電話」 チャリティーコンサート	モテット、三つの宗教的な歌ほか（メンデルスゾーン） オルゲルビューヒライン（J.S.バッハ）	指揮：佐々木正利
2000年	11月23日	クリスマス・オラトリオ全曲演奏会	クリスマス・オラトリオ（J.S.バッハ）	指揮：H.ヴィンシャーマン （ドイツ・バッハゾリステンと共演）
2001年	3月13日	「盛岡いのちの電話」開局10周年記念 チャリティーコンサート	十字架上のイエス・キリストの七つの言葉（シュッツ）ほか	指揮：佐々木正利
	8月11日 12日	岡山バッハカンタータ協会主催ドイツ演奏旅行 に有志（24人）同行参加 ライプツィヒ・聖トーマス教会聖歌隊席 クヴェトリンブルグ・シュティフツ教会	カンタータ39番,102番,158番, モテット6番（J.S.バッハ）	指揮：D.ティム （ライプツィヒ・バロックオーケストラと共演）
	10月16日	クルト・マズア指揮ロンドンフィル ベートーヴェン「第九交響曲」演奏会	交響曲第9番「合唱」（ベートーヴェン）	在京のパイオニア合唱団 と共演
2002年	1月13日	25周年記念演奏会	モテットOp.29,74（ブラームス） カンタータ150番,184番,39番（J.S.バッハ）	指揮：佐々木正利 （東京バッハ・カンタータ・アンサンブルと共演）
	10月 4日	ライプツィヒ・バロックオーケストラ演奏会	カンタータ45番（J.S.バッハ） グローリア 二長調（ヴィヴァルディ）	指揮：D.ティム （ライプツィヒ・バロックオーケストラと共演）
	12月 3日	鳴海真希子さん追悼演奏会	ヨハネ受難曲から第39,40曲 （J.S.バッハ）	指揮：佐々木正利
	12月22日	久慈・こはくのまち第九演奏会	交響曲第9番「合唱」（ベートーヴェン）	指揮：石川善美 東北大学交響楽団　久慈市民第九合唱団と共演

2003年	11月30日	マタイ受難曲演奏会盛岡公演	マタイ受難曲（J.S.バッハ）	指揮：H.ヴィンシャーマン （ドイツ・バッハゾリステンと共演）
	12月 5日	マタイ受難曲演奏会東京公演	マタイ受難曲（J.S.バッハ）	指揮：H.ヴィンシャーマン （ドイツ・バッハゾリステンと共演）
2004年	7月 28日 30日 31日	仙台宗音、岡山バッハカンタータ協会、 高知バッハカンタータフェライン主催の ドイツ演奏旅行に有志(38人)参加 アイゼナッハ・聖ゲオルク教会演奏会 アイスレーベン・聖アンドレアス教会演奏会 ライプツイヒ・聖トーマス教会演奏会	カンタータ131番、21番 （J.S.バッハ）	指揮：D.ティム （ライプツィヒ・バロックオーケストラと共演）
2005年	1月30日	マルコ受難曲演奏会	カンタータ106番、79番、105番 マルコ受難曲　（J.S.バッハ）	指揮：佐々木正利
	4月15日	シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン・ アカデミー合唱団盛岡公演 （盛岡バッハ・カンタータ・フェライン共演	羊飼いの歌ほか(メンデルスゾーン) アヴェ・マリアほか(シューベルト) 婚礼の合唱ほか(ワーグナー) 流浪の民(シューマン) 赤とんぼ(山田耕筰)	指揮：佐々木正利 ロルフ・ベック
	12月 27日 28日 30日	第5回ドイツ演奏旅行 ミュンヘン・ヘラクレスザール グラーフィング・シュタッドプファール教会 デットモルト・ノイエアウラ	 メサイア/ドイツ語版(ヘンデル) クリスマス・オラトリオⅠ～Ⅲ部 （J.S.バッハ） 交響曲第9番「合唱」（ベートーヴェン）	指揮：G.シュマールフス

なおこのほかにも、クリスマス・チャリティー・コンサート、チャペル・コンサート、合唱祭、新春コーラスコンサートなどに参加、出演しています。

2005. 12.27　メサイア（ドイツ語版）／ヘラクレスザール

合唱団出演者

《ソプラノ》

青柳 奈津子　赤塚 温子●　阿久津 巴　荒田 奈美○　大石 敦子　大崎 孝子
大嶋 美奈子　大矢 克子　小笠原 香澄　岡野 美映子　尾友 佳子　小原 育世
鹿糠 朋加　金成 佳枝　菊池 節子　熊谷 充代　古川 亜湖　斎藤 純子
佐々木 恵利子　佐藤 聡子　佐藤 詩織　志賀 友加里　李沢 有希　高橋 知子
高橋 はるか　高橋 美織○　田村いずみ●　竹下 雪乃　千田 絵未　千葉 明日香
奈良 めぐみ　三原 佳織　明内 泰詠子　村元 彩夏　矢幅 嘉子　吉田 智穂
本良 いよ子※

《アルト》

阿部 一葉　荒谷 麻衣子　在原 泉　犬亦 敦子　大友 麻紗子　小川 暁美★
小野寺 洋子　金子 千鶴　菊池 葉子●　桐原 絹子　齋藤 貴子　佐々木 美智子
佐藤 公　新宮 央子　杉本 絵美　鈴木 英美　高橋 温○　田口 千紗都●
武田 敏恵　多田 繭子○　丹野 まり　千葉 ゆつき　原 穂波　林 昭子
平井 良子　三宅 真佐子　村上 殖子　茂木 史　茂木 容子　谷地畝 晶子
渡辺 しをり　柴田 映子※

《テノール》

太田 穎則　小川 隆弘　柿崎 倫史　勝部 健作　金田 浩治　佐々木 幹雄★
佐藤 比佐史　田崎 信行　新山 隆健○　西野 真史●　沼田 臣矢○　藤原 康弘
三原 正敏　目黒 賢哉　森 順一　吉村 哲●　河原 清※

《バス》

赤塚 貴史　稲生 創　稲葉 正俊　小原 一穂★　後藤田 篤夫　今野 勝彦
佐藤 和久　高橋 聡　田沢 隆　千田 敬之　平野 亘　藤村 誠毅○
横山 泉●　渡辺 信之　成田 丈二※　黒森 淳+　増田 鋭治+

指揮者:佐々木 正利／伴奏者:劔持 清之

★…コンサートマスター／●…パートリーダー／○…サブパートリーダー
※…仙台宗教音楽合唱団／+…オーケストラ・アンサンブル金沢合唱団

♪団　員　募　集♪

盛岡バッハ・カンタータ・フェラインでは、団員を募集しています。
合唱が好きな方、年齢、経験問わず歓迎いたします。
お気軽に見学にいらしてください

◆練習日時：毎週火曜日午後６時半～９時／毎月１回日曜日午後１時半～５時
◆練習場所：盛岡市内丸教会（盛岡中央郵便局から与ノ字橋方向へ、１つ目の信号手前右側角）
◆お問合せ：渡辺　信之　ＴＥＬ　０１９－６６５－１６１４
◆Ｅ－mail：ｍａｉｌ@ｍｂｋｖ.ｊｐ

ヨハネ受難曲演奏会スタッフ

マネージャー	トータル	渡辺　信之（全般、印刷）	字　幕	Ｇ・マーク・若林　敦盛
	チーフ	茂木　容子（企画渉外）	楽　譜	村元　彩夏・吉田　智穂
	サブ	高橋　美織（WG）	受　付	鈴木　勇二・佐々木聡子
	ステージ	田沢　隆（スケジュール）	楽　屋	原　穂波・大矢　克子
会計	全　般	赤塚　貴史・尾友　佳子	事務局	荒谷麻衣子・新宮央子・茂木史
	チケット販売	渡辺しをり・吉田　智穂	印　刷	三澤印刷
渉外	オケ・ソリスト	大嶋美奈子・千田　絵未	録　音	ＩＢＣ開発センター
	広　告	大石　敦子・志賀友加里	録　画	近藤敏行・石垣美和・萩原康弘
	ＰＲ	荒田　奈美・高橋　美織	写　真	カメラのこだま
印刷	デザイン	齋藤　貴子	宿泊協力	ホテルメトロポリタン盛岡
	構　成	大友麻紗子・荒谷麻衣子	旅行手配	トラベルｅ旅.ｃｏｍ

“万 感”

佐々木 正利

まず初めにお願いしておきたいことがあります。それはこの拙稿のことについてですが、ひとくちに30年と言っても、それはそれはたくさんの思い出、とりわけ苦楽の歴史がいっぱいに詰まっており、そんな訳で平生の字数をはるかに越える文章になろうかと思います。従いまして、プログラム（パンフレット）における拙文の掲載場所を巻末に、できれば一番最後にして戴きたいこと、また文字のサイズを読み得る範囲での最小サイズにして戴きたく存じます。

このことは、次の意味合いを包含しています。すなわち、内容が極めてプライベートかつ本音であるため、読むことに抵抗がある方には簡単に看過できる状況を作りたい、ということです。あと何年フェラインを続けられるか分からないなか、我が想いと足跡をしっかり綴っておきたい、そうした我が儘をどうぞお許し下さい。

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン（以下、フェラインと略す）が誕生した昭和52年（1977年）の2月といえば、私は芸大大学院修士課程の学生で、4月から新たに設置される博士課程への進学を切望していた時期にあたります。修了一月前のこの時期に何故進学が決定されていなかったかといえば、芸大の博士課程は新設の課程でしたので、入試は新年度に入ってから行われることになっており、確か4月の第1週に実施されたと記憶しています。

さて、私は小さい頃から音楽を学んでいた訳ではなく、高校の時、合唱コンクールで審査員からいい声だと名指しで誉められはしましたが、音楽の素養などまったくなかった人間でした。その私が、恩師高橋功宜先生の献身的なお導きと、他に類を見ぬほどの運の良さに恵まれて芸大に進学を許されたものの、周りとのレベルの差は一目瞭然、何とか落第せずに4年間を全うし、岩手に戻って、恩師のように高校の立派な先生になりたいと、自然に、と言うか、それしか選択肢は考えられないという状況でした。

それと同時に、比べる者もいず、競い合うこともなく、また恥にも外聞にもまったく無縁でしたので、せっかく芸大にいるのだからと、無謀にも、いろいろな分野の仲間たちに働きかけて創ったのが『東京芸大バッハ・カンタータ・クラブ』なのです。こうして昭和45年（1970年）の9月に産声を上げたこのクラブが、一昨年創立35周年を迎え、今も芸大一真面目に音楽に取り組む団体と評価されているのですから、創立メンバーの一人としてこんな嬉しいことはありません。しかし考えてみれば、多分芸大一音楽的素地のない田舎出のイモにいちゃんが、1年生にしてこんな大それたことをしたのですから、世の中ホントに面白いものではあります。

それはさておき、翌年このカンタータ・クラブには、本日も共演戴いているオーボエの小畑善昭さんやフルートの立川和男さんが入部され、その翌年にはヴァイオリンの蒲生克郷さんが入部されてきてと、その力を着々と伸ばしていきました。また彼ら後輩だけではなく、ヴィオラの李善銘さんたち先輩も何人か入部して下さるに至って、ついには昭和48年（1973年）、第1回目の演奏旅行を敢行するまでに成長し、ここ盛岡でもようやく春の気配が漂い始めた3月、岩手公園に程近い教育会館ホールでお披露目ができたのでした。私の歌はとても稚拙なものでしたが、創設時からの指導者小林道夫先生はじめ、周りの人たちが気を遣って下さって私にソロを用意して下さり、未成熟ではありましたが故郷に錦を飾らせて戴きました。緊張もしましたが、とても晴れ晴れとした気分だったことをよく覚えています。

ところで、私は“超”がつくほどの晩学でしたので、周りの声楽科の学生のように思うようにはまったく歌えず、またオペラやリートについてもほとんど無知さ加減丸出しの体。結局、試験など人前で歌うに際しては、先生も含めて誰もが知らない宗教曲を歌って恥を凌ぐのが精一杯でした。その私が、いつの間にか宗教曲は佐々木、という逆レッテルを貼られて、徐々にプレッシャーを感じていくのですから不思議です。

みなさんには、何か重要なことを為さねばならぬ前夜、気持ちが高ぶってなかなか寝つけないという経験がありませんか。私は、多分ダメもと、ということもあってのことでしょうが、緊張はするけれど俗に言う“あがる”ということには無縁な人間でしたが、あれは4年生の時のこと…。そう、あるオーディションの前夜、後にも先にも、人生で唯一回、寝苦しい夜を体験したのです。

芸大では毎年12月、朝日新聞社とタイアップして『芸大メサイア公演』を行っています。これは芸大の声楽科の学生1～4年まで全員の合唱と、教官で組織されるオーケストラ（管弦楽研究部）によって演奏されるチャリティーコンサートなのですが、この公演のソリストに選ばれる（オーディションにエントリーできる対象者は基本的にその時の4年生。現在は若干システムが違っているようです）ことは、学生にとって、ある種のステータスとなっていました。何故なら、前年の3年生までは、にわか評論家然として、バックの合唱団の中から、今年のソリストは云々と品定めをしていた者たちが、最終学年時にはそれこそ学年代表として前に立つ栄誉を担うことができ、またその実、歴代のソリストのリストを見ますと、我が国の声楽界を代表してきたお歴々たちがずらりと名を並べているのですから。

勿論、私もこれには憧れていましたし、できることならやってみたいと思ってはいました。しかし、無論のこと、そんな実力は私にはない。ところが周りはといいますと、前段で述べましたように、宗教曲は佐々木だ、今年は佐々木で決まりだ、と騒ぐのです。これには正直、ありがたい!と思いました。何故ならば、こういう風評が立つということは、ライバルたちはみな辞退するのだろうと思ったからです。しかし私の考えは甘かった。発表されたエントリー表を見たならば、何と!ほとんどみな受けるではないですか。これには正直、焦りました。と

いうのも、力では絶対的に劣っているのは自明のこと。されば失敗など決して許されない。自分のベストをもってしてはじめて彼らと勝負できることを悟るはめになったからです。下手だ、駄目だと自認していた私には、一挙にプレッシャーが襲い掛かることとなりました。

さて、私が何故こんなプライベートなことを長々と書き綴っているのか、みなさん、不思議に思われることでしょう。その理由についてですが、実はこのことから派生する、ある経緯が、フェライン創設時に私をしてタクトを取る決断をなさしむる遠因となったからなのです。そして、そのことは今でも私のエネルギーの源の一部となっていますので、その辺についてもう少し語らせて戴きたいと思います。

先のメサイアオーディションの結果は、私にとってはそれこそ筆舌に尽くし難いほどの喜びとなりました。同時に、私の中に何か新しい息吹というか、自信が生まれました。事実、このメサイア公演後、少なからぬ仕事の話が持ち込まれ、その後の大学院での学びも揺るぎないものとなっていったからです。歌う度に私の評価は高まり、芸大メサイアでの成功は、自分自身で感じている以上にすごいことなんだなあ、と改めて思ったものです。

この頃、時をほとんど同じくして、ふるさと岩手では県民会館の建設が行われていました。岩手の人々にとってはそれこそ待望のホールの完成です。というのも、県都盛岡にあるホールが、響きに難がある教育会館と、時代がかった県公会堂だけというのは、あまりにも貧相な文化行政の象徴と言わざるを得ず、それだけに、県に対して新ホール建設を根気強く働きかけて下さった芸術文化部門のリーダーの方々には、心底感謝したものでした。

さて、東京にいた私たちにも、この新ホールの落成に合わせて、一連の音楽行事が組まれたという情報が伝わってきました。確かヘンデルの『メサイア』で柿落としだったと思うのですが、私を驚ろかせたのは、その後のプログラムにバッハの『マタイ受難曲』やヴェルディの『レクイエム』といった尋常ならざる大曲が予定されていたことです。大体立続けにメサイア、マタイとヴェルレクをできる合唱団なんて世界的に見てもそうざらにあるものではありません（事実、今のフェラインでは無理です）。これが私の知らぬふるさと岩手の合唱界の底力かと、嬉しくも、少々怖くもなったものでした。

そんな最中です。そのメサイア公演のソリストについて、県内在住者か県出身者を対象としてオーディションを行うという情報がもたらされたのです。これは私にとっては朗報でした。というのも、この頃の私は、最前で述べたように破竹の勢いで歌勢を伸ばしていましたし、しかも事もあろうに曲目が絶対的に自信のあるメサイアなのですから。私は勇躍して岩手に乗り込んできました。そして歌いました。出来としては上々、周りの人の歌を聴いてよもや落とされることはあるまいと思いました。

しかし、結果が発表になる前に、一緒にオーディションを受けた人が私の耳もとで囁きました。これは出来レースだよ、と。誰が聴いてもあなたがいいことは分かるけど、結果は絶対にあなたにはならないよ、とです。えっ、まさか!と思いましたが、蓋を開けてみましたら、案の定、囁いてくれた人が挙げた名前通りの人たちが通っていました。この時の私は若かった。心底憤りを感じた。公共の場でこんなことが行われていいのか、一生懸命準備をし、お金と時間をかけて帰ってきた若者に、こんな仕打ちがあってたまるか、と。そう、コンクールやオーディションには、コネや裏があって当り前だということを知ったのは後々のことだったのです。でも私は絶対にしないぞ!、情報操作や依怙贔屓、私物化なんてこと、絶対にあってはならないこと。この時からです、自分の信念でもって正統的な音楽活動を続けていこうと決心したのは。

フェラインができた昭和52年（1977年）当時は、勿論新幹線なんてありません。私は月に1回、土曜日に帰盛して実家に泊まり、日曜日に練習をしてその日の夜行で東京に帰っていました。毎週の練習は飯島隆さん（現盛岡大学教授）が中心となって仕切って下さっていました。しかし、いくら若いとはいえ、片道6時間半もかけて特急『やまびこ』や『はつかり』に乗り、時には、10何時間もかけて夜行寝台急行『いわて』や『きたかみ』の固い椅子に耐えて行き来するには相当の覚悟がいります。こんな私を支えてくれたのは、先のマタイを歌った人たちの情熱であり、そしてメサイアオーディション落選の悔しさでした。ある一部の人たちにコントロールされ、本物を見る目が曇らされるようなことがあってはならない。私自身も、井の中の蛙にならぬよう進んで外部に門戸を開き、小林先生から戴いた本物を盛岡のみなさんに伝えなければと使命感に燃えていました。もっとも、蛇足ながら付け加えておきますが、一連の開館記念事業（演奏会）を指揮された濱田徳昭さん（故人）は、内実オーディション時の私の歌をいたく気に入って下さり、それが証拠に、後年マタイやヨハネやロ短調ミサ、それにモツレクなど何度も共演させて戴きました。

フェラインの歴史を私なりに振り返ってみる時、何回かのターニングポイントがあることに気づきます。一つは私がドイツに留学したことです。昭和55年（1980年）の4月にドイツに渡りましたから、フェラインと私はまだ3年のおつき合いでしたが、その間着々と芸大バッハ・カンタータ・クラブとの交流を深め、フェライン自前で演奏会を開催することはできなくても、芸大を招いて共演させて戴く（それはそれで経済的な面を含めて大変なことだったと推察します）ことによって、カンタータを実体験しておりました。このカンタータ・クラブとの繋がりをも考えると、私の後を任せられるのは李さんか蒲生さんしかいないだろうということで、いろいろ相談し、結局、蒲生さんに無理難題を聞き入れて戴くことになりました。私は、多分もう一生盛岡には帰っては来ないだろうという思いで出立しましたが、蒲生さんはクマさん（私の渾名）がいない間の繋ぎと思っておられたようです。いずれにしましても、蒲生さんには本当にお世話になりました。この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。

ところで、創立から数年間のフェラインには、今よりも恵まれていたことがありました。それは前述の小林道夫先生に音楽を教わり、実際に演奏会でもタクトをとって戴けたことです。今だったなら、世界で活躍する日本人音楽家の第一人者は誰かという問いには、ほとんど全員が「小澤征爾」と答えるでしょう。しかし、1970年代に同じ質問をしたならば、誰もが「小林道夫」と答えたものでしたし、特に外国人の間では断然の人気を誇っておられました。

小林先生の名声を証拠立てるものは、世界的演奏家との度重なる共演の事実をみれば分かります。そこには、ディートリッヒ・フィッシャー=ディースカウやエルンスト・ヘフリガー、ピラール・ローレンガーといった声楽家、フルートのピエール・ランパルやオーレル・ニコレ、オーボエのハインツ・ホリガー、クラリネットのカール・ライスター、トランペットのモーリス・アンドレ、リコーダーのフランツ・ブリュッヘン等々、錚々たる巨匠、名匠の名が連なります。そう、先生はこうした世界超一流の演奏家の大切なパートナー、伴奏を務められたのでした。それほどまでに先生の音楽性や様式感は高い評価を得ていたのです。

今、名前を挙げた演奏家たちには共通していることがあります。それはみな息づかいで音楽を創る人たちであるということです。バッハのカンタータが、いや広く音楽そのものが、この息づかいから成り立っており、喜怒哀楽すべての表情に独特の息づかいがあること、そしてこの息づかいを大切に扱い感じてこそ、音楽に魂が入って来ることを、フェラインは小林先生から教えて戴きました。

私は、昭和57年（1982年）4月に岩手大学に着任しました。ということは、一生いようと思って渡ったドイツには2年弱しかいなかったことになります。もっとも、恩師小林道夫先生は1年しかいなかったそうですから（留学地は偶然に二人ともデットモルト北西ドイツ国立音大です）、学びの量は期間の長さとは無関係ということになります。このデットモルトという町はとても小さく、岩手でいえば遠野市のようなところ。人口も5万人に満たず、主要本線からはずれたローカル線で駅舎も小さく、二つの世界大戦に巻き込まれることがなかったため、昔ながらの町並みをそのまま残した北西ドイツののどかな町でした。この町に世界的な大音楽家が何人も住んでおられ、そこから世界に向けて音楽を発信し、世界に通用する音楽家たちを送り出していたのですから、これは筆舌に尽くし難いほど素晴らしいことです。

思えば、このデットモルト北西ドイツ音楽大学に留学できたのは、本当にラッキーなことでした。私は前々から、コンクールを受けるのだったならバッハ・コンクールのみ、留学するのだったらクレッチマールかエクヴィルツのところと決めていました。大抵、世界で行われているコンクールは分野が特化されているものが多いのですが、私のような宗教曲が得意な人間が受けられるコンクールは限られています。そのなかでも、バッハゆかりの地ライプツィヒで4年に一度行われるバッハ・コンクールは憧れのコンクール。一方、日本でテノールの先生に師事したことのなかった私は、留学する際には絶対テノールに就こうと思っていましたが、そのなかでも発声法の大家フレデリック・フースラーの直弟子のヘルムート・クレッチマールと、エヴァンゲリスト（福音史家）の名手クルト・エクヴィルツにターゲットを絞っていました。ところがこの二人の居所が分かりません。現在のようにインターネットがある訳でもないので、散々苦労したあげく、やっとのことでエクヴィルツを探し出しましたが、何と彼はヴィーン国立歌劇場で歌っていて弟子は採らないとのこと。でも、クレッチマールについては皆目情報がありません…。

昭和54年（1979年）の暮れ、私は西ドイツの国家歌手ローレ・フィッシャーの公開レッスンを受講しました。この名アルト歌手はバッハ・コンクールの審査員も務めておられる方ですが、彼女から私は大変気に入られ、来年5月に開催されるコンクールを受けにいらっしゃいと強く勧められました。私は準備期間が短いからと断りましたが、そこで新たな難問が発生します。というのは、来年を逃すと5年後の次回は私は年齢オーバーでエントリーできないことが分かったのです。そんな訳で翌年、急遽ライプツィヒ国際バッハ・コンクールを受けに渡独し、幸運にも入賞することができたのですが、私の幸運はそれに留まりませんでした。

このコンクールは旧東ドイツで開催されるため、共産国特有の判官びいきが露骨に横行し、西側諸国から入賞するのは至難の技と言われていました。ところが、この時の1位は今仲幸雄さんというれっきとした日本人。彼は芸大で私の2年先輩でカンタータ・クラブにも顔を出されたことがある旧知の間柄でしたが、芸大時代は鳴かず飛ばずのどん尻成績。10数年ぶりにお会いした訳ですが、正直、へえ、まだ歌やってたんだ、って思うくらい、ライバルとしては楽勝、楽勝とほくそ笑み、軽視していたものでした。ところがです。歌を聴いたらおったまげた!。目を瞑って聴いていると、そこにまるでD.F.ディースカウがいるかのような錯覚を呼び起こすのです。これには大層驚かされました。今仲さん、一体誰に就いてそんなにうまくなったの?、と。　彼曰く、数年前からこちらに留学してきていて、クレッチマールというテノールの教授に習っているんだよ、ですって。こんな偶然ってありますか。あんなに探し求めていたクレッチマールの直弟子が目の前にいる。しかも、あの今仲さんをしてこんなにも素敵な歌をうたえる歌手に育て上げたクレッチマールという先生は、一体どんな先生なんだ!?（今仲さん、本当にごめんなさい。でも本心からそう思ったのですから）。ライプツィヒからの帰り、今仲さんに同行してデットモルトに出向いたのは言うまでもありません。先生は、勿論優勝した今仲さんを心から祝福されましたが、5位の私をも労って下さいました。西側から入賞することの難しさを知っておられ（事実、我々二人以外の入賞者は東独、ロシア、ルーマニアの方々でした。何年か前にフェラインがヴィンシャーマン先生とマタイ受難曲をやった時のエヴァンゲリスト、ニルス・ギーゼケはこの時の6位でした）、私の歌を聴かれて即座に採って下さると約束して下さいました。

恩師ヘルムート・クレッチマール教授が奉職されていたデットモルト北西ドイツ音楽大学には、信じられないほどの豪華教授陣が控えておられました。小林先生の恩師ギュンター・ヴァイセンボルン（ピアノ伴奏法の歴史的大家）をはじめ、チェロのアンドレ・ナヴァラ、ホルンのミヒャエル・ヘルツェル、クラリネットのヨースト・ミヒャエルス、フルートのパウル・マイゼン、ファゴットのヘルマン・ユンク、チェンバロのヴァルデマール・デーリング等々、数えあげたら枚挙にいとまがありません。彼らが日常茶飯事のように大学で、あるいは町中で素敵な音色とテクニックと音楽性を発揮されるのですから、それはもう天国にいるような気分でした。

そのような夢のような教授陣のなかでも、一際輝かしい金字塔を打ち立て続けておられる教授がいました。その名をヘルムート・ヴィンシャーマンと仰り、現役にしてドイツの権威ある『リーマン音楽事典』に載っているという

信じられない音楽家です。世界各国から先生を慕って多くの留学生が集まり、我が国からも宮本文昭さんなど著名なオーボエ奏者が先生のもとで学ばれていました。先生のオーボエは、甘美で生命力に溢れ、音楽が常に新鮮に変化していくので聴く人を飽きさせません。音自体が極上であるとともに、音域が変わってもフォルテでもピアノでも音質が変わらない。音程もピタリと決まっていて、太く輝かしい音色なのに軽やか。まるで天から降ってくるかのような温かく弾力性に富んだ素晴らしいオーボエで、こんな人の傍で音楽を学べるなんて、何て幸せだぁ～、って思いましたっけ。

それだけではなく、ヴィンシャーマン先生は人間的にも大変優れたお方で、私たちを愛し、温かく包み込んで下さるのはフェラインの会員ならみな知っていること。こうした先生を紹介したエピソードが、『オーボエネットワーク浜松』のホームページに載っていますので、以下に引用します（無断で、ゴメンナサイ&執筆者不詳）。

（前略）ヴィンシャーマンといえば「名教師」とよく言われることがあります。数々の優れた演奏家を育てたことで有名だと思います。そこで、ここでは純粋にオーボエ奏者としてのヴィンシャーマンに焦点をあてることにしました。ヴィンシャーマンも何度か聴いていますが、ドイツバッハゾリステンとしての演奏会について書きます。確か旧清水市の市民会館だと思います。もう25年以上前のことです。当時学生だった私は、お金がなくてよい席がとれず、もっとも安い席に友人と座っていました。その日の会場は、がらがらでした。よい席が空いているのにお金がないためにそこに座れないので悔しいねとか、ドイツバッハゾリステンが生で聴けるチャンスなのに静岡市や清水市の人ってどうして聴きにこないのかなと友人と話していました。さて演奏会が始まり、ヴィンシャーマンがステージに出てきたのですが、額に手をかざして客席を見渡しています。そしてなんと!手を大きく振って、遠くの観客に「おいで、おいで」を始めたのです!一瞬は何をしているのかな?と思った私たちでしたが、すぐに「それそれ!」と席の移動を始めました。もちろんS席ど真ん中!客席の中央が埋まったのを確認したヴィンシャーマンはおもむろに演奏を始めました。素晴らしく暖かい音がホールに広がり、何とも言えない気分になりました。ステージから出てくる音がとても暖かく私に近づいた音に手を触れると温度が感じられそうな気がしました。耳で聴くというよりも体で感じる温度のある音でした。暖かい音のクッションに包まれて、ゆったりと聴くことができました。これだけ温度を感じる暖かい音は、後にも先にも聴いたことがありません。1曲目が終わるとアナウンスがはいりました。「ただいま、ヴィンシャーマン先生が席を移動されるようにおっしゃいましたが、正規の方がみえましたら、速やかに席をお変わりくださいますようお願い致します。」スタッフとしては仕方のないことですが、まったく興ざめのアナウンスでした。1曲目が終わって入ってきたお客さんがウロウロしていました。（後略）

私は、憧れのヴィンシャーマン先生のオーボエで1回歌ったことがありますが、勿論、それはそれは至福の時ではありましたが、到底先生が高嶺の花であることには変わりありません。後年、帰国してから草津の国際音楽祭でヴィンシャーマン先生と何年かぶりにご一緒する機会に恵まれました。無論のこと、先生は私など覚えてはおられまい、と緊張の面持ちで先生の方に近づいていきますと、まだ距離があるのに、私のことを認めて、「ササキサ～ン、オゲンキデスカア?。オコサン、オオキクナラレマシタカア?」ですって。先生は、分野も違う異国の一留学生が、子連れ留学してきていたことまでしっかりと見ていて下さったのです。これにはただただ感激でした。そして、更に続けて「アナタノコーラス、トテモヒョウバンガイイデスネ。コンドゴイッショイタシマショウ」とも。こうしたことがあって、ヴィンシャーマン先生との共演が実現していったのですから、私たちは大変な幸せものですね。

ところで、フェラインにとっての次なるターニング・ポイントはと言えば、やはり私の帰国と盛岡永住だと思います。昭和56年（1981年）までフェラインは、東京からの通い指揮者（月1回）のもとで活動を続けてきた訳ですが、翌昭和57年（1982年）からは毎週火曜日の定期練習日に指揮者が張り付くことになったのですから、嫌が応にも趨勢は充実していきます。殊に、私が岩手大学で教鞭を執ることになって、それまで20人に満たなかったフェラインが、徐々に会員数を増やし始め、また、今は姉妹団体として親密な間柄である仙台宗教音楽合唱団（以下、宗音と略）の指揮者に私が任命されるに至って、カンタータだけでなく、規模の大きい楽曲も視野に入れた活動が展開できるまでに成長しました。そうした私たちにとってラッキーだったのは、バッハ記念の年を3年後に睨んで計画を立てられたことでしょう。

昭和60年（1985年）は、言わずと知れたバッハイヤー。そう、バッハ生誕300年の年でした。同時に、ヘンデルも生誕300年、更に「ドイツ音楽の父」ハインリッヒ・シュッツも生誕400年とビッグイヤーとなりました。振り返りますと、この年から約1年半に亘るフェラインの活動は、現在も顔負けの信じられないものです。その内容をご紹介致しましょう。昭和60年3月16日バッハ『ヨハネ受難曲』（盛岡公演）、3月17日『ヨハネ受難曲』（仙台公演）、11月3日ヘンデル『メサイア（英語）』（仙台公演）、11月29日『メサイア（英語）』（盛岡公演）、昭和61年4月11日シュッツ『ドイツ・レクイエム』、バッハ『モテット1番』他（盛岡公演）、4月29日ヘンデル『メサイア（独語）』（西ドイツ・オルデンブルグ公演）、4月30日シュッツ『ドイツ・レクイエム』、バッハ『モテット1番』他（西ドイツ・フリーゾイテ公演）、5月1日ヘンデル『メサイア（独語）』（西ドイツ・オルデンブルグ再演）、5月3日シュッツ『ドイツ・レクイエム』、バッハ『モテット1番』他（西ドイツ・ドゥイスブルグ公演）、5月4日ヘンデル『メサイア（独語）』（西ドイツ・デュッセルドルフ公演）、6月15日シュッツ『ドイツ・レクイエム』、バッハ『モテット1番』他（仙台公演）、10月1日ヘンデル『メサイア（独語）』（仙台公演）というすさまじいエネルギーです。一昨年暮れ、ドイツへ演奏旅行に出掛け、4日間でヘンデル『メサイア（独語）』、バッハ『クリスマス・オラトリオ』、ベートーヴェン『第九交響曲』をやったフェラインのエネルギーもすごいですが、昭和60年～61年のフェラインも負けず劣らずだったのですね。

こうした意欲的な活動は確実に現在のフェラインに繋がっていますが、一方で悲しい出来事も起こりました。最前でご紹介した副指揮者の飯島隆さんをはじめとして、創立メンバーの半数近くが退会されたことです。これには多分二つの要因があったと推測して

います。一つは、バッハのカンタータをやるに、大人数は必要ない。小規模で室内楽的な活動をしたいと思われたのではないかということ。そして、もう一つは、演奏会を開くために活動しているのではない、という理念的なことではなかったかと思っています。私が、盛岡に着任するまでのフェラインは、合唱団というより講習会という感じでした。月に1回の私のレッスンは、曲作りに専念する、即ち曲を完成させるというより、楽曲分析や魅力の解説といったレクチャーが主であったと思います。つまり、自力で演奏会を開ける体力も意志もそう強くはなく、従って楽器編成や予算をまったく気にする必要はなかったので、手当り次第カンタータの名曲を音出ししていったものでした。それが、地元に定着してからは、岩大の学生を育てる意味もあって、練習は文字通りレッスンとなり、完成に向けての努力を要求するようになるにつけ、厳しさが増していったと思うのです。私は、元来刺激的な人間ですから、敢えて厳しく突慳貪にすることもしばしば。歯に衣を着せぬ物言いには抵抗感があったのだろうと推察しています。しかし、一番の問題はと考えますと、前述の諸兄諸姉が何故辞めるに至ったかの理由を、こうして私が知らない、推測することしかできないという、意志の不疎通があったということでしょう。よく合唱はメンタルハーモニーが肝心と言いますが、こういう状況では良い合唱はできようはずもありません。まあ私の主義として、来る者は拒まず、去る者は未練たらたらで追わず、ですから、その時その時で与えられた戦力で、より優れた感動を追求していく姿勢には変わりはありませんが。

フェラインの合唱はうまいか否か?。その答えは大変難しいです。時には宗音の方が感動的な演奏をしますし、また岩大合唱団がうまいなあ、と感じることもあります。その辺を語るには、他の人々を引き合いに出して、その方々が洩らされた感想等を綴るしかないように思います。

私は、フェラインの過去の歴史において、振ってもらいたいなあと思った人が何人かおります。時系列的に羅列しますと、小林道夫、ヘルムート・リリング、小澤征爾、クルト・マズア、ヘルムート・ヴィンシャーマン、岩城宏之、ハンス・ヨアヒム・ロッチュ、リッカルド・シャイー、ペーター・シュライアーの諸氏たちです。ここで、はてな?と思われる名前が挙がっていることにお気づきでしょう。そうです、何故に小林先生のお名前が、と思われたことと思います。実は、前段でご紹介しました昭和60年(1985年)のヨハネの演奏会ですが、私は小林先生に振って戴きたいと思い、心の想いを切々と書き綴った手紙、それは便箋16枚にものぼる膨大な力作でしたが、その手紙を小林先生に書き送りました。ところが先生のご返事はノーでした。理由は、先生ご自身の演奏活動がピークに達していたこともありましたが、クマさん(既述のように私の渾名です)がいるのに私がしゃしゃり出る幕はない、というものでした。カンタータ・クラブでクマさんの手腕をとくと拝見させて戴いていたから、特に合唱指導においてみなさんに伝えるべきものはない、と返信には書かれてありました。そんなはずはないことは、本日の演奏に参加して下さっている同志はみな知っていることなのですが、先生は頑固な一面がおありになり、熟考して一旦お決めになられた結論はまず崩されないことも承知していましたので、泣く泣く涙を飲んだのでした。でも、その当時のフェラインのメンバーの大多数、特に新しく入って来られた方々は、小林先生の素晴らしさを知らない訳で、その時から、私は弟子を芸大に送ろうと決意したのです。そう、芸大に入れば小林先生のレッスンを受けられるからです。

前段に列記したマエストロ(巨匠)のなかで、クルト・マズア、ヘルムート・ヴィンシャーマン、岩城宏之、ハンス・ヨアヒム・ロッチュの先生方には、夢叶いフェラインを指揮して戴けました。ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団やニューヨークフィルハーモニー管弦楽団の音楽監督を歴任なさっておられるマズア先生とは、かつて読売日本交響楽団の定期演奏会で、メンデルスゾーンの『エリア』のソロで共演させて戴き、その崇高で厳格な音楽作りに感銘を受け、いつかはフェラインも、との思いを持ち続けていましたが、平成13年(2001年)に盛岡市民文化ホール開館5周年記念のイベントとして開催された、ベートーヴェンの第九交響曲の演奏会で、ロンドンフィルハーモニー管弦楽団と共演させて戴けました。また、バッハも歴任したライプツィヒ聖トマス教会の前カントール(音楽監督)で、バッハ・コンクールの審査委員長であったロッチュ先生には、フェライン創立20周年記念演奏会で、『マニフィカト』や『昇天祭オラトリオ』等を振って戴きました。また、ヴィンシャーマン先生との特別なおつき合いは周知の方も多かろうと思います。こうした先生方からの評判は上々、マズア先生からは、第九をがならずこんなに音楽的に歌える合唱団が日本にあるなんて驚きだ、とお誉めの言葉を戴きましたし、ロッチュ先生からは、大人のコーラスとしては紛れもなく世界一級品だ、また絶対に振りに来たい合唱団だ、と有り難いお言葉を頂戴しました。また、ヴィンシャーマン先生は、いつだったかテレビのインタビューに答えて、フェラインがこれだけうまいのは、多分盛岡には他にしたいと思うような魅力がないからじゃないか、と独特の言い回しで評価して下さいました。

ところで、昨年の6月、日本の楽壇はまた一つの大きな巨星を失いました。マエストロ岩城の早過ぎるご逝去です。岩城宏之先生は、指揮者としての晩年、オーケストラ・アンサンブル金沢(以下、OEKと略)の育成に努められ、OEKを世界的な室内オーケストラにまで育てられましたが、私もソリストとしてOEKのステージを何度か踏む間に、ある年のこと、2年後には東北の方に演奏旅行をする計画があるということを知らされました。また、盛岡には私の指導する合唱団があること、そしてその合唱団はなかなか評判がいいことなどを事務局が知るに至り、私に共演の話がもたらされたのです。そしてついに、平成7年(1995年)11月、岩手日報社が主催して下さりOEKとフェラインの共演が実現しました。曲目はハイドンのオラトリオ『天地創造』、フェラインは、この年の5月に第3回ドイツ演奏旅行を敢行し、ミュンヘン等でニュルンベルク交響楽団とこのオラトリオを共演していました。

さて、岩城先生とのエピソードを紹介致さねばなりません。OEKは盛岡の演奏会の前々日、茨城県のつくばで公演を終えていました。そして公演前日は完全休養日。マエストロだけ盛岡に先乗りして、合唱団のリハーサルです。練習会場に着かれたマエストロ、まずは私がいるのにびっくり。どうしてソリストの佐々木が今日ここにいるの?、とのご質問。そうです、岩城先生は私が合唱指揮を担当していること、またその前に、私が盛岡に住んでいることをご存知なかったのです。さて、練習開始です。

先生のいつもの流儀で、最初からご自分では合唱は振らずに、合唱指揮者に振らせます。さて、私がタクトを降ろし、最初の曲を終えました。先生は、じっと腕組みをしたままで、次へ行って、とのご指示。次のナンバーも、またその次のナンバーもまったく同じ指示。あっという間に一部が終わってしまいました。そうしましたなら、先生やおら同行の事務局員に指示。何と、休養を取っているOEKの団員に、合唱団がおそろしく上手だから、もう一度各自譜読みを徹底するように伝えなさい、ですって。更に、OEK合唱団のリーダーに盛岡まで聴きに来るように伝えて下さい、と仰っているではありませんか。岩城先生といえば、泣く子も黙る、というか、業界で1～2位を争うほど厳しいお方なのは周知のところですが、その岩城先生を唸らせたのですから、フェラインも大したものだ、とその時は誇らし気な気分になったものでした。

私は、数年前からこのOEK合唱団の指揮者も務めています。OEK合唱団は、北陸3県（石川、富山、福井）からオーディションで約60人の団員を構成する半プロ合唱団。結局、前段の演奏会のレセプションで、岩城先生が「一流のプロ声楽家が指導しているのだから、この合唱団がうまいのは当り前」と評価して下さったことをして、遠隔の地にはありながら私に白羽の矢が立ったという訳です。OEK合唱団は言うまでもなくプロオーケストラOEKの附属物。毎年毎年いろんな指揮者といろんな曲を共演します。特に外国人指揮者との共演が多く、合唱指揮者としても大変勉強になります。今まで、マタイや天地創造、モツレク、戴冠式ミサなどの宗教曲だけでなく、マーラーの交響曲第3番やメンデルスゾーンの『真夏の夜の夢』なども演奏し、時には三善晃の『三つのイメージ～童声、混声合唱とオーケストラのための』なんていうめちゃくちゃ難しい初演物にも取り組みます。こうしたなか、特筆すべきはやはりリッカルド・シャイーとペーター・シュライアーとの共演でしょうか。とにかく音楽の底が計りしれない。歴史に残るプロというのはこういう人たちのことを言うんだな、と強く印象づけられました。

歴史に残る音楽家といえば、小澤征爾さんも忘れてはいけません。私は小澤さんとは7回共演（マタイ3回、ロ短調ミサ3回、モツレク1回）の経験がありますが、彼の集中力はそれは見事なもの。完全暗譜はお手のもので、隅々まで目を利かせられるタクトは小澤さん独特のものです。いつだったか、新日本フィルとロ短調をした時のオーボエの小畑善昭さんと散らした火花は、集中力の戦いとして今でも脳裏に焼きついています。小澤さんは、私たちソリストにも、小畑さんのようなオブリガート・プレーヤーにも、一見主体性という自由を与えます。テンポやアーティキュレーション、曲想に至るまで、まずは我々に委ねます。そして音楽が流れ出すに従って、タクトや顔の表情で自分の世界に我々を引き込んでいくのです。あの目は、リリングやシュライアーにも共通するもの。世界の超一流はすごい、心からそう思いました。

話は変わりますが、あれは昭和61年（1986年）のこと。岡山県の合唱連盟こぞって、小澤率いる新日本フィルを迎えロ短調をやった時のことです。私もソリストとして参加しました（これが縁で、後に岡山バッハ・カンタータ協会が発足し、今年創立20周年を迎えます）が、その際のマエストロの楽屋で、フェラインのことをマエストロにお話し、いつか振って戴けないかと申し出たのです。小澤さんもフェラインのことはどこかで耳に挟んでいたようで、来年すぐという訳にはいかないけれど、数年のスパンのなかでは考えましょう、と言ってくれました。が、後日、新日本フィルの松原千代繁事務局長から電話があり、先の話の実現は難しくなったとのこと。彼によりますと、岡山の後に行った広島でのブリテン『戦争レクイエム』の合唱があまりにひどく、もう金輪際地方の合唱団とはやらない！、と小澤さんは宣言なされたのだそうです。そうでなくとも、ボストンとヴィーンと東京を行ったり来たりの生活で、体力的にも、もうしんどいことはしたくないとのこと。フェラインにとってはあまりに残念至極、正直広島を恨みました。

フェラインの今後のスケジュールは、まだリジッドなものではありませんが、本年5月にベラルーシで行われる植樹祭を記念してのショスタコービッチの『森のうた』賛助出演、12月の盛岡市民文化ホール落成10周年記念、マーラー交響曲第2番『復活』、2008年6月に予定する主催演奏会『カンタータ第78番、第80番、第182番、第187番』、2009年5月、台湾エヴァー・グリーン交響楽団の日本公演でのブラームス『ドイツ・レクイエム』、そして2009年12月、ついにリリングからオファーのあったヘンデル（モーツァルト版）『メサイア』を予定しています。特にも、リリングとの共演は、もし実現すればフェラインの真骨頂を問われる試金石となりうるもの。無理せず、油断せず、着実に力を蓄えていかねばならないと思っています。

フェラインは、よく歌える者たちを集めているからうまいのは当り前、という声を耳にすることがあります。でもこれは大きな間違いです。正しくは、歌えない者たちを訓練してフェラインが育て上げているのです。とは申しても、確かにフェラインは他の合唱団よりは状況が恵まれているのは確かです。何故なら、普通なら合唱団の指揮者になり得る人材や、立派にソリストとしてやっていける人材がごろごろいるからです。特に、二人のコンサートマスター、小原一穂さんと佐々木幹雄さんは、その実力からして全国区。フェラインで独占していないで、二人に一般合唱団を持たせたならば岩手の合唱界もますます発展するのになあ、と思う反面、いや、この先もフェラインの先頭に立って導き引っ張っていってもらいたい、と念願している自分がいます。また、もう優に10数年以上も練習ピアニストを務めて下さっている劔持清之さんも、フェラインにとってはなくてはならない存在です。無償での奉仕を願い出るほどフェラインを愛して下さる劔持さんの存在は、会員の心のかすがいとなっているのです。

最近、フェラインの組織が頼もしく見える回数が多くなってきました。石倉久夫初代代表に始まって、木村吉彦さん、小野寺昌勝さんと続いていく代々の代表団の奮闘は、私にとっても心の支えとなり、本当に感謝しています。そうした流れのなかで特筆すべきは、前代表の下田潤さんと現代表の渡辺信之さんのお働きでしょう。私は、学生を教育する立場にありますから、学生が汗を流したり、苦労したりする姿を目の当たりにしますと、ここが肝心、頑張れ、頑張れ、と声援を送りたくなります。そうした学生を見遣りますと、その向こうに下田さん、渡辺さんの姿が見えるのです。下田さんは、長年の人生経験と独特の視点から世情を鋭く斬り、その切り口を学生に見せて

くれることで、学生を考えさせ行動を促されて参りました。渡辺さんはそれに加え、生来の行動力でもって体制を組織化し、検証という機能の重要性を学生に教えて下さいました。代表団の見事なリーダーシップが今のフェラインの屋台骨をしっかり支えて下さっていることに、全幅の信頼と感謝を捧げます。

私は、よく学生に対して、学内のサークルと学外の活動、両方に関与しているのが望ましいと説きます。何故ならば、同じような問題に遭遇した時、学生同士では、年代も環境も財力も知力も似通っている者たちの集合体であるため、解決策を見い出すに相応の時間と議論が必要になるのに対して、社会の活動では、様々な職業、年齢構成、経験の違いを持った人たちの集団がゆえ、バラエティな解決方法を体験できるからです。その意味でも、岩大合唱団とフェライン、両方に入っているのが理想的だと考えています。フェラインは音楽作りだけでなく教育の場としても長きに亘って貢献してきている、そう自信を持って言い切れます。

ここで、改めて申し上げますが、ヴィンシャーマン先生には、感謝しても感謝しきれないほどお世話になってきました。ですから、フェラインの30周年という節目の年、先生にタクトを執って戴けるということは無上の喜びとなりました。ところで、今回の演奏会では、当初、私がエヴァンゲリストを務めるつもりでした。しかし、いろいろ考えたあげく、結局、取り止めることに致しました。理由はといえば、先生には申し訳ないのですが、86才というご高齢であるがために、何が起こるか予測ができないこと。もし、先生に不測の事態が起きたならば、結局、代りにタクトを執れるのは私しかいないこと。22年前の私は、無謀にも指揮とエヴァンゲリスト両方をこなしましたが、さすがに現在は自信がないこと。代りのエヴァンゲリストが見つからないなら私がやらなければなりませんが、幸いにも五郎部俊朗さんが引き受けて下さったこと、等々が挙げられます。

また、今回は《師弟の関係》がコンセプトの一つとなりました。勿論、私はヴィンシャーマン先生の弟子と自認（先生はどう思われているか分かりませんが）していますが、岩手大学から送り出した小原浄二君、佐々木直樹君、鏡貴之君はすべて芸大で多田羅迪夫先生に師事していますから、多田羅ファミリーです。また、先の五郎部さんも、ロッシーニのオペラや様々な歌曲を歌わせたなら右に出る者がいないくらいの実力の持ち主ですが、その彼も新分野の開拓、可能性にチャレンジして、数年前から私にバッハのレッスンを受けている努力家で、もう既に私のタクトでヨハネを歌い称賛を浴びましたし、ヴィンシャーマン先生のタクトでもマタイを歌われていますので、広い意味では佐々木ファミリーです。

多田羅さんとのおつき合いはとても長く、私が尊敬し、目標としてきた、名実ともに日本の第1人者歌手。還暦を迎えられた今なお、その瑞々しい歌声と精緻なまでの音楽性で聴衆を魅了し続けておられます。長年ラブコールを送り続けてきた多田羅さんが、我々の前に初登場し、ついに盛岡の方々に多田羅さんの歌を聴いて戴けることと、そして多田羅さんにフェラインの合唱を聴いて戴けることの両方が一挙に達成できて、本当に幸せに思います。ソプラノの井上しほみヘラーさんとアルトの佐々木まり子さんとは芸大の同級生。昭和45年（1970年）に一緒に芸大バッハ・カンタータ・クラブを立ち上げた同志です。特に、しほみさんはリリングのバッハ・カンタータ全曲録音CDでソプラノソロを担っておられる世界的歌手。彼女の歌をみなさんに聴いて戴けることも、とても嬉しいことです。

かつて、芸大バッハ・カンタータ・クラブの声楽陣には「盛岡体験」という言葉が流行ったそうです。バッハの歌い方を知り、バッハの様式に馴染むには、フェラインに混じって一緒に歌うのがいい、とした盛岡体験。確かに、個の力では見劣りしても、合唱という集合体での表現力やアプローチの仕方ではフェラインはお手本になる、という時もありました。また、現在はフェラインの遠隔地会員として名を列ねられている東京在住の後藤田篤夫さんが、宗研合唱団の団長としてヴィンシャーマン先生と長いおつき合いをなされていた頃のこと。平成3年（1991年）のドイツ・バッハゾリステンとフェラインの初共演（カンタータ第140番、コーヒーカンタータ等）に続いて、平成5年（1993年）のマタイの東京公演で再びフェラインが起用されるに至って、後藤田さんは、何故、世界の巨匠が地方の団体を使うのだろう、との疑問を持たれ、訝し気に会場に足を運びましたが、演奏を聴いた途端に納得しましたよ、と仰って戴いたフェライン。確かに、フェラインが確実な能力を有していた時代もありましたが、しかし、最近のカンタータ・クラブは、かつてとは比べものにならないほど上手になり、また東京をはじめ、全国各地の合唱団も軒並み実力をアップされてきた現状を鑑みると、フェラインも再び原点に戻って勉強することが肝要と、志を新たにしなければなりません。

それと同時に、フェラインの今後をどう見守るか。特に、これからの10年をどう見据えるかが問われています。私自身は、できれば半世紀を達成するまではフェラインを全うしたいという希望を持っていますが、並行して後任指導者探し、育成に取り組んでいかねばなりません。かつて盛岡に赴任した頃、地方からの発信!、盛岡をバッハのメッカに!、というキャッチフレーズを掲げ、この25年一心不乱に活動して参りました。しかし、人間にも団体にも寿命があります。また、使命も、変わらぬものと、刻々変わりゆくものが混在しています。私のなかには、やり残したもの、若しくはやりたいと思うものがまだまだ沢山ありますが、それらを携えて日本に、いや世界へ私たちの音楽を問うことと同時に、一方では、まずは岩手の各地から、いずれは東北各地へと、本物の音楽普及行脚をしたい、という願いを密かに抱いています。そして、真の意味での市民合唱団、県民合唱団、国民合唱団になることを目標に掲げて、盛岡バッハ・カンタータ・フェラインという名前に捕われずに、全方位にアンテナを向け、まずはこの10年頑張ってみたいと申し上げたなら、みなさんは驚かれるでしょうか。バッハの音楽が、ドイツ人のためだけのものでないように、クリスチャンのためだけのものでないように、フェラインが醸し出す音楽も、不特定多数の人々を勇気づけ、そして癒していけるように、万感の想いを胸に秘め、今31年目へ一歩踏み出します。

次回演奏会の予定

佐々木正利、飯靖子ジョイントリサイタル

◆

2007年 6月3日(日)

場所:盛岡市民文化ホール 小ホール

主催:盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

盛岡市民文化ホール10周年記念
マーラー交響曲第2番「復活」演奏会

◆

2007年 12月21日(金)

場所:盛岡市民文化ホール　大ホール

合唱:盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

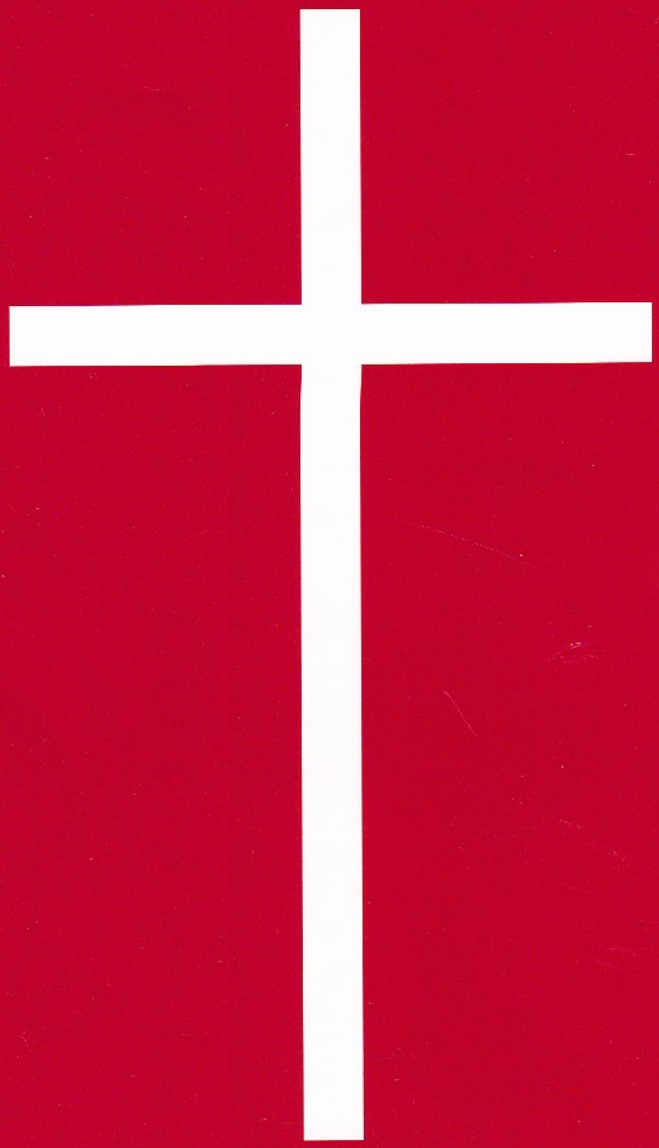
J.S.バッハ:カンタータ演奏会

◆

2008年半ば

[プログラム]

1)カンタータ182番　2)カンタータ187番

3)カンタータ78番　4)カンタータ80番

合唱:盛岡バッハ・カンタータ・フェライン